Soul for the Sword

presented by 屑★星

◆序章

　桃の花が咲いている。良く手入れされた桃園にそよ風が吹き抜け、舞い落ちる白い花弁が幻想的な風景を形作っている。桃園の中で一際大きい桃の木の根元に座し、一人の少女が琴を爪弾いている。少女が奏でる琴の音色は哀切を帯び、少女の気持ちが伝播するように桃園を悲しみが包み込む。

　突如として音が乱れ、痛みを堪える様な小さな悲鳴が音曲を止める。少女が奏でる琴の七本ある弦の一本が切れて弾け、少女の白魚のような指に赤い痣をつけた。指を押さえて痛みに堪えていた少女の瞳が潤み、一筋の涙が頬を流れた。少女は顔を覆い大粒の涙を零してすすり泣く。

　演奏に失敗したからではない。切れた弦が指を傷つけたからでもない。少女の嘆きはまるで世界から拒絶されたかのようだった。嗚咽とも共に揺れる身体に合わせて少女の手首に嵌められた腕輪の鈴が鳴る。……蕭(しょう)、……蕭(しょう)と囁くように鳴る鈴の音と少女のすすり泣く声だけが桃園に響く。

　不意に少女の身体に柔らかな感触が当る。最初、猫かと思ったその生き物は自分の身体を少女に擦り付けるように摺り寄せてくる。

「慰めてくれるの……？」

　少女の呟きに答えるように白い生き物は身体を擦り付ける。猫かと思われたその生き物は体長こそ猫とさして変わらないが、明らかに猫とは違っていた。全身を白い体毛で包み、華奢な胴体には不釣合いなほどに大きい尻尾を持ち、耳からは巨大な触手のような手のような長い耳のような形状のものを生やしている。何より目につくのはその紅い瞳。一切の感情を感じさせないかのような深い紅い瞳だ。もう一度少女の足首に頭を擦り付けると、少女の正面に回り前足を揃えて座りこちらを見詰めてくる。紅い瞳が射抜くかのように少女を覗き込む。

「今、君の心が悲しみに包まれているのを見て、僕はやって来たんだ。」

　口はまったく動いていない。口と思しき器官は一切の動きをみせていないが、確かに少女の耳にはその生き物が放つ声が聞こえていた。いや、正確には耳ではない。耳を通り越して直接脳に語りかけてきているのだ。甘く優しげな声が少女の心に直接触れる。

「君の心に例え何を犠牲にしても―自分の命や世界の運命すらも引換えにしても―叶えたい願いが有るんじゃ無いかな。」

それがどんなに非人道的な行為であるかを少女は理解している。自身の人間としての尊厳のみならず、その生命、自分が生きてきた世界、自分を愛してくれた人、そして自分が愛した人の命すら奪い去ってしまうものだというのは理解している。

だからこそ、少女は顔を覆い世界を拒絶して泣いていたのだ。

そこまでしなければ結ばれる事が出来ない自分の愛する人を想って泣いていたのだ。

「僕にはそれを叶える力がある。君の願いをたった一つだけ叶える事が出来るんだ。それがどんな願いであろうともね。」

目尻に溜まった涙を指で拭い去り、少女は白い生き物に問い返す。

「本当に……本当に私の願いを叶えてくれるの?」

白い生き物は小さく頷きゆっくりと一呼吸おくと、紅い瞳をにっこりと微笑むように細めて言葉を吐き出した。

「だから、僕と契約して魔法少女になってよ!」

これから為そうとしていた行為を思えば今更何を恐れる事があろうか。

こうして一人の魔法少女が誕生した。

◆第一章

いつもと同じ朝、いつもと同じ一日の始まり。それが恨めしく思えるのは、世界でただ一人自分だけだろうと暁美ほむらは思う。〃いつもと同じ朝〃そう感じる人間はどこにでも存在するが、それが本当に〃いつもと同じ〃と認識しているのはこの世でただ一人あたしだけだ。それは時間遡行者としての宿命とも言える。テレビのニュースキャスターは聞き飽きたニュースソースを読み上げ、いつもと変わらぬタイミングで原稿を読み違え、そして謝罪を行う。ドアを開け、外に出れば決まった時間に決まった顔触れが足早に学校や会社へと向かっている。時間を気にして時計を見るタイミングまで〃いつもと同じ〃だ。

だが、この〃いつもと同じ〃一日の始まりが本当にいつもと同じでは無いことを知っているのも暁美ほむらただ一人である。いや、正確には検証対象となる〃以前〃を知っている者が暁美ほむら一人であるのだから、その差異を感じ取れるのが彼女一人だと言える。世界は確かに〃いつもと同じ〃だと言える。瞬時に眼前の光景が変わる事も、極度に文明が変幻しているような事は無く、そこにいる人間も街並みも何も変わらない。そこに存在する人間同士の関係性が変わることも無い。しかし、必ず何かが、どこかが変わっているのである。

暁美ほむらがその願いによって得た魔法少女としての能力は〃時間の巻き戻し〃と〃時間停止〃である。このうち〃時間の巻き戻し〃は彼女自身の意志と特定条件によって発動し、決まった時間……即ち彼女が長期入院し、退院するその日へと時間を巻き戻すことが出来る。ただし、この時間の巻き戻しというのが単純な時間の遡行ではない。これは恐らく願いを叶える側の意向によるものなのだろう。単純な時間遡行ではどれだけエネルギーを回収できたとしても、やり直しをされては回収したエネルギーが無に帰してしまう。そこで、願いを叶える存在であるインキュベーターは時間遡行ではあるが、異なる並行世界への移動という方法を設定した。これにより、例え暁美ほむらが時間を遡行したとしても、その時間軸で回収したエネルギーは無に帰することもなく並行世界間で共有される事となる。端的に言うとループを行う度にカウンターがリセットされるのではなく、累積されていくのだ。では、彼女が繰り返す並行世界とは何だろう。これは可能性によ

って分岐した世界といえる。例えば一人の人間が朝一番で飲む飲み物をコーヒーにするかお茶にするか、どちらか迷っているとしよう。この時選ばれた側と選ばれなかった側、どちらを選んでも世界は続く。だが、厳然として選ばれなかった可能性は存在する。選ばれた側がその世界に存在する人間が認識する現行世界であるとするなら、選ばれなかった可能性を並行世界と呼ぶ。暁美ほむらが旅する並行世界とはそんな世界。それは〃誰かが選択肢を謝った世界〃。

結果として暁美ほむらは一度として同じ時間を繰り返したことなど無い。全てが一見同じであるが、僅かながらに違っている世界での繰返しを行っている。だが、今回の差分に関しては暁美ほむらにとって捨て置けぬ事態となっている。その机の上の写真を見るまでは、いつもと同じく必要な〃物〃だけを回収し、誰にも気付かれずに姿を消そうと思っていた。

〃なんで……何故、あの子の写真がこんな所に……？〃

机の上に並べられている写真を見紛うはずはない。鹿目まどか、その人である。現在、暁美ほむらが潜入しているこのビルは外見からの印象としては普通のオフィスビルである。しかし、そこに掲げられている看板の名前を少し調べればこの国の広域指定組織の末端企業であることは直ぐにでも分かる。いや、そんな必要も無いのかもしれない。このビルの入り口で二十分も張り込めば、出入りする人間が社会の表通りを歩く事が憚られるようないかがわしい輩であることが分かるだろう。今、鹿目まどかの写真を挟んで差し向かいになって話し合っている人間もその類だ。

「まぁおめぇに難しい話をしたところで、分からねぇだろうが。要はこいつの親を脅す材料が欲しいって訳だ。」

二人の会話を聞く為に時間停止を解除し、ロッカーの中へと身を隠す。二人のうち、比較的身なりが整った兄貴分と思われる人物が煙草の煙を吐き出しながら語りかけている。身なりが整っているといっても、開襟のシャツから覗く胸元に光る金のネックレスにオールバックの髪型はどんなに控え目な表現をしてもチンピラという形容詞以外は浮かんでこない。

「でも、なんでこいつの親はそんなに恨まれてるんです？俺達だって危ない橋渡るんですから、少しくらいは事情を知っておきたいっすよ。」

「あーなんだ。俺もそれほど詳しく知ってる訳じゃねーんだが。要

は新しい医療技術の認可をこいつが邪魔してるって話なんだよ。」

「新しい医療技術？」

「コンパクテンシャっつってな。どうも人間の脳や記憶を別の人間に移し替える技術らしいんだ。」

正確には魂魄（こんぱく）。つまり魂を電子化し別の人間のみならず、別の容れ物に移し替える技術である。丈二の認識ではそれを別の人間への記憶の転写としているに過ぎない。

「要は金持ちのじーさま達が、余命いくばくも無いって状況になって、別の若い肉体に脳だけを移植して生き延びようってことらしいんだ。」

「へーすげぇ技術じゃないですか。それの何がいけないンすか？」

「俺にも良くわからねーんだが、なんでも事故が起こる可能性が多いんだと。」

倫理上の問題もある。生命というタブーに触れることを神が許さないのか、魂魄転写（こんぱくてんしゃ）には事故が多発した。いわゆる脱魂燃焼（レイスバーン）である。魂魄転写（こんぱくてんしゃ）を行う際に生体脳は異常な高温を発し、転写元を破壊してしまう。脳細胞は確実な死を迎え、転写元となった人間の生命を奪う。そんな技術がまっとうな社会が許すはずもなく、上海の裏社会で細々と文字通り影ながら行われるのみに留まっていた。

「じゃあ、こいつは良い奴じゃないですか？事故を未然に防いでるんでしょ？」

「洋一……おめぇ分かってないな。別に事故が起こるとかそんな事は関係ねーんだよ。じじいどもは今日明日にも死ぬってんだ。それなのに事故が怖くて延命の可能性を捨てるか？もちろん代わりの〝若い肉体〟なんてのにも頓着しねえよ。自分が生き延びるためならな。俺達のシノギはこのビジネスを成立させて、そのじじいたちに健康で後腐れの無い若い肉体を提供することだ。」

善意の第三者としての肉体提供者を斡旋する……それを射太興業で行う。ちょっと街を見渡せばいくらでもいる食い詰めた人間を或る時は言葉巧みに誘い出し、或る時は半ば強制的に浚い、転写先の肉体としようということだ。

「技術の提供を上海は青雲幇（チンワンパン）の劉（リュウ）さん。そしてそれを実現する機材、システム、場所の提供やそれらの認可をこいつの会社が握ってるらしいんだわ。」

机におかれたまどかの母親……鹿目詢子の写真を指差す。まど

かの母親が何を生業としているかを、ほむらは正確には知らない。確か医療関係の商社に勤めているとか聞いた記憶がある。その彼女が何故こんな連中に関わりを持たれるような事になってしまったのか。鹿目まどかの母が少々押出しの強い人物だというのは知っている。しかし。恨みを買うにしてもここまでの事態に巻き込まれるようなものであるはずが無い。ほむらが考えを回らしていると、尚も兄貴分の丈二が話し出す。

「デカいシノギになるからな。万が一があっちゃいけねぇ。そこで反対派の中心人物となっているこいつを脅して退場して貰うんだ。」

「だったら、何も回りくどいことをしなくても、この女を直接さらっちまえば良いいんじゃないっすか?」

少々身なりの良い……とは言ってもその筋の人間特有の趣味の悪さが垣間見える兄貴分とは違い、一見して街のチンピラ然と分かる身なりと頭の悪さがうかがい知れる弟分が反駁する。

「俺も最初はそう思った。だが、どうやらこの女、意外と骨太らしい。ちょっとやそっとの脅しに屈するようなタイプじゃない。逆に下手な脅しはこちらの足元を掬われる恐れがある。」

吸いさしの煙草を苛立たしげに灰皿に押し付けて揉み消しながら丈二が吐き出す。

「こういうタイプには搦め手の方が効くんだよ。本人は強い積りだろうが、家族を人質に取られるとコロッと参っちまう。」

まどかの写真をトントンと指で弾きながら言葉を続ける。

「お、良い手が思いついた。この女さらってそのまま提供しまえば良いんだ。一家まとめて行方不明にしちまっても良い。」

「流石、兄貴だ。悪知恵が働くや。」

「まぁ俺らやくざ者なんてのは、嫌われてなんぼだからな。これくらいの汚れ仕事はしないと、おまんまが食えねぇわな。」

限界だった。これ以上一秒でもこんな奴らの口を動かさせる気は無かった。

突如としてロッカーから飛び出して来た少女に驚く二人が、身構えるよりも早くほむらの踵が弟分の洋一の顎を捉えた。構えも何もあったもんじゃない。力任せに放ったその蹴りは洋一の下顎を粉砕し、その身体を5mほど吹き飛ばし、煙草の煙で黄色く変色した壁に叩きつけた。魔力によって強化された身体能力は常人の領域を遥かに凌駕している。たとえ武道や格闘技のような訓練されたフォームではなく、力学的に理に適っていない構えだろうと

尋常ならざる破壊力を見せ付けた。今の暁美ほむらの身体能力ならばオリンピックに出場さえすれば金メダルでオセロが出来ることだろう。

「て……てめ……」

驚き、動揺、恐怖。どこから出てきた？何故こんなことをする？我が目を疑うような強烈な暴力。どれに反応するかを瞬時に選び取ることが出来ず胡乱な目で問い質そうとする。ほむらは丈二が立ち上がるよりも早く歩み寄ると先ほど盗み出したばかりの拳銃を、そのぽかんと開けた口の中に差し入れた。いや、差し入れたという表現には語弊がある。半開きの口に銃口を突っ込むのだ。当然の様に上顎の前歯は叩き折られているのだから。

「あなたはもう喋る必要は無いわ。」

熱く滾る気持ちとは裏腹に恐ろしく冷たい声が出た。と、自分でも驚いた。机上に置かれた写真へと目線を向け、それに釣られるような形で丈二も視線を移す。

「二度とこの子の前に現れないで。この子にもしも危害を加えるようなら、次は命が無いと思うことね。」

「おめ……やくざ者にこんな真似をしてタダで済むと思ってるのか？」

銃口で口腔を塞がれながらの聞き取りにくい声ながらも、丈二が恫喝する。

「ええ……もちろんタダで済むなんて思っていないし、タダで済ます積りも無いわ。」

ほむらは丈二の口から拳銃を引き抜くと、照準をまだ倒れたままの洋一に移すと躊躇い無く引き金を引いた。乾いた発砲音と共に弾き出された弾丸は真っ直ぐに洋一の身体に突き刺さり、その命を奪う。

「よ……洋一ーーーっ」

「あなた達に口で言っても分からないわよね？」

再びほむらは銃口を丈二の眉間に突きつける。

「てめぇ分かってんのか？射太興業を敵に回す事になるんだぞ。お前がちょっとばかし強いからって、射太興業全体を敵に回して街を歩けるとでも思ってるのか？」

丈二は射太興業から直盃を受けた直系の組員である。その丈二に危害を加えるということは射太興業に弓を引くということになり、その落とし前を付ける為には何でもやる。素人に喧嘩で負

けたとあっては二度とやくざ稼業を張っていく事は出来ない。舐められたら終わりの商売なのだ。面子を保つ為ならば何でもやる。素手で勝てないのならば道具を持ち出すだろう。一人で勝てないなら徒党を組んで襲う。不意打ち、人質、嫌がらせ、ありとあらゆる手段を使ってでも落とし前をつける。それがやくざだ。

「お前の家族もお前の友人も……この街にいられると思うなよ。嫌になるくらい追い込んでやるぜ。」

丈二が脅しと思って口に出した台詞はほむらにとっては逆効果となった。再びほむらの逆鱗に触れたと言っても良い。

「そうね……あなた達はきっとそうでしょうね。だから、組ごと潰してあげるわ。それならあの子に危害を加える人はいなくなるでしょう。」

「お前……本気か？」

ほむらが引き金にかけた指に力が入るその瞬間、けたたましくドアが開け放たれて組員と思しき人相の悪い男達が入ってきた。銃声を聞きつけてやってきたのだろう。

「お前らそこで何をやっていやがる。お客人がお越しだから静かにしておけと言っておいただろうがっ！」

若頭の大西が数人の若衆を連れて部屋に入ってきた。その後ろには客人である青雲幇（チンワンパン）の劉豪軍（リュウ・ホージュン）の姿もあった。

血の気の多い連中が集う場所である。組員同士のいざこざは日常茶飯事だ。エスカレートするあまり銃が持ち出されることも珍しくは無い。今回もそんな事だろうとタカをくくっていた。そのような事態になった時、はねっ返りを抑えるのは若頭である大西のような人間の仕事である。

だが、今回は少々事情が違っていた。現場にはセーラー服のようなコケティッシュな衣装の少女が一人、手には拳銃を握り締められている。その銃口は丈二の眉間に突きつけられ、今にもその命を奪おうとしている。視線を部屋の隅に送ると、丈二の舎弟にあたる洋一が胸から大量の血を流して息絶えている。間違いなくただの喧嘩とは違う。

「若頭っ！あれは俺達の道具ですぜ。」

ほむらが握っている銃は今さっきまでこの部屋のロッカーに保管されたものである。それに気付いた組員の一人がやや興奮気味に大西に伝える。

「丈二よぉ……要はその娘っ子に銃奪われて、舎弟を殺られて、イ

ワされてるって事か？」

　客観的に見ても事実としてそうである。だが……

「怒り通り越して、呆れるわ。」

　大西が大仰に手を振ると、射太興業の若衆がそれを合図としてほむらににじり寄る。気付くと室外にもすわ出入りかと物音を聞きつけた構成員達が集まってきていた。

「構わねぇから道具奪い取って、女は叩きだせ。」

　大西の指示にパンチパーマで額の辺りに5センチ程の傷跡のある男が動き出す。

「丈二の事は構うな。うちにあんな若い者はおらん。」

　そう言い捨てると後ろに控える劉豪軍（リュウ・ホージュン）に視線を移す。

「まったくうちの若い者と来たら……申し訳ない。お恥ずかしい所をお見せしました。」

　劉豪軍（リュウ・ホージュン）に軽く詫びつつ、交渉を再開しようと室外に出るように促す。しかし、劉豪軍（リュウ・ホージュン）の瞳はほむらから離れない。

　それに気付き振り向くとそこには、ほむらを取り押さえようと近づいた若衆達が宙に飛ぶ様が展開されていた。魔力によって強化された暁美ほむらの肉体はさながら野生の獣のように凶悪な戦闘力を発揮して、当るを幸いに次々と組員達を破壊して行く。まるで砂糖細工を崩すかのように簡単に。ほむらの掌が触れた部位は顔だろうと腕だろうと抉り取られたように欠損し、殺傷していく。

　大西は慌てて室外に控えていた構成員達に檄を飛ばす。

「お前達！何を見てやがる。チャカでもなんでも構わねぇ。何でも使ってあの女を止めろ！急げ！」

　控えていた若衆のなかで偶然に懐に道具を持参していた何人かがわっと室内に押し入る。だが、彼らがその道具を構えるより早く、全員同時に地に臥すことになる。

　一際大きい銃声。まるで……何発もの銃が同時に発射されたかのような大轟音。発射のタイミングは今、地に斃れ臥している彼らにとっても大西達にとっても同時であっただろう。

　時間停止。ほむらに与えられた固有の能力。これを使用することによって、止まった時の世界で銃弾を配置。再び時を刻ませる事で一人一斉射撃を行う事が出来る。当然、彼らの耳に届く発射音は一度だけだ。それが聞こえたかどうかは疑問だが。

　一瞬にして構成員の大半を失い大西は青ざめる。更に後ろに控

えた素手の構成員達を促すが、惨劇を前にして無手で立ち向かうほどの度胸は持ち合わせていなかったのか、怯えた表情を見せている。強面の彼らであろうとも、死は怖い。特にこのような無為の死は怖い。所詮はやくざである。利己的に他者から利益を詐取する事を生業とする者達。その先に待っているものが死であると分かっていて飛び込む者は少ない。そのような侠客を部下に持たなかったことが大西の不幸であった。

見るに見かねた劉豪軍（リュウ・ホージュン）が大西に声をかける。

「大西若頭。ここは俺に預けてもらえますかね。」

「劉さん……これはうちの組の問題だ。それに相手は小娘だ。青雲幇（チンワンパン）の劉豪軍（リュウ・ホージュン）の手を借りたとあっちゃうちらの面子は丸潰れだ。」

「そんな事を言ってる場合じゃないですよ。」

振り向く大西のこめかみを銃弾が貫く。大西が斃れたのを見て取った残った若衆は悲鳴をあげながら、はうはうの態で逃げていく。

「あぁ……だから言わんこっちゃ無い。」

崩れ落ちる大西を見下ろしながら、劉豪軍（リュウ・ホージュン）はやれやれといった面持ちで身構える。こうなっては最早ここにいる人間を生きて帰す積りはないのだろう。

「こんな事になるのなら濤羅（タオロー）の奴を連れてくれば良かったか。」

惨劇を前にしても焦る様子も見せずに呟く。孔濤羅（コン・タオロー）は青雲幇（チンワンパン）の凶手（きょうしゅ）……つまり暗殺を生業とする男である。豪軍（ホージュン）とは戴天流（たいてんりゅう）を共に学んだ朋である。凶手（きょうしゅ）としての仕事の無い時期は豪軍（ホージュン）の警護役を務めている。濤羅（タオロー）自身は兄弟子のボディガードを勤めることに口では不満を示している。戴天流（たいてんりゅう）門下では豪軍（ホージュン）に敵わなかったのだ。その兄弟子の警護など不要ではないか？不満を口にしながらも、しっかりと警護役を務めているのは二人の友情といえよう。

〝ここで死ぬ訳にはいかないな。瑞麗（ルイリー）の為にも。〟

一月後に控えた豪軍（ホージュン）と瑞麗（ルイリー）の結婚式を前にして、兄弟水入らずの時間を設ける為に濤羅（タオロー）を日本に置いて来た。その失敗を悔いる。

「あなたが青雲幇（チンワンパン）の……それじゃあ逃がす訳にはいかないわね。」

ほむらが照準を豪軍（ホージュン）の眉間に合わせる。この場、この企みに関わった者を一人として逃がさない。非情な決意が満面に現れてい

る。

ほむらの握る拳銃は初速で秒速400mほどの弾丸を発射する。反射神経を凌駕する速度で飛来する弾丸は狙いさえ誤らねば、確実に豪軍の命を奪うだろう。だが、その弾丸は空しく壁に弾痕を作るのみだった。二度、三度と完璧に照準を合わせたにも関わらずその弾丸が豪軍を捉えることはなかった。豪軍は半身になり僅かな運足でほむらが放つ弾丸をいなしてしまう。

「得物を持ってこなかったのは、確かに不用心だったかもしれないな……」

豪軍の手にもしも一刀が握られていたのならば、その場から足を動かす事もなく済ませられた。そう言いたいかのような口ぶりだ。

「何故当らないか、分からないって顔をしているね。」

拳銃の弾を避ける。この一事は豪軍程の拳士ならば然程の難しさではない。銃口の向きと手首の角度で弾の飛ぶ方向は確認できる。ましてや室内ということもあり、風の抵抗も少ない。弾丸は銃口から過たず真っ直ぐに対象物に向かう。発射のタイミングは筋肉の張りと指の動きと肩の動作が教えてくれる。だが、これらの情報以上に内家拳士である豪軍には相手の〝意〟を感じて動く事が出来る。それはほむらが相手を撃とうと思う意志。それは弾丸の初速よりも疾く豪軍を撃つ。豪軍は遅れてやってくる弾丸を僅かに動いて避ければ良い。呆れるほど簡単な作業だ。

人間とは時として人知を超越した体術を身に付ける者……いわゆる達人という人種がいることを知ってはいたが、いざ目の前に現れるとその出鱈目ぶりには驚かされるばかりだ。

「別に分からなくても良いわ……当らないのならば、当るようにしてあげれば良いのだから……」

自己の理解に及ばぬ内家拳士の超絶技を見てもほむらは冷静だった。確かに人間の範疇としては凄まじい業の冴えだ。だが、それも人間の範囲でならという話だ。魔女や使い魔……ましてやあのワルプルギスの夜との戦いを繰り返した暁美ほむらにすれば、焦るほどのことではない。何より、これより見せるほむらの能力には適わない。そう認識していた。

ほむらがその自己の能力を発動させようと身構えた瞬間、ほむらが動くよりも疾く豪軍は拳銃の間合いを一瞬で縮めほむらの懐に肉薄する。

「くっ……！！」

自己の能力である時間停止よりも、拳銃での近接射撃による迎撃を選択したのがほむらの失態だった。握り締めた左手の拳銃は照準を合わせる暇すら与えられず豪軍(ホージュン)の右腕によって払い落とされる。

”すまないな。俺もまだ死ぬ訳には行かないんだ。”

豪軍(ホージュン)の左掌ががらあきとなったほむらの水月に触れる。そう……打つ、突く、殴るではなく……触れる。衝撃すら与えない優しい打撃。

「？！」

絶好の機会をミスミス見逃して、柔らかな……まるで羽毛が触れるような感触を残して豪軍(ホージュン)はほむらに背を向ける。

ほむらは吹き飛ばされた拳銃を拾うことなく、迷わず先ほどロッカーから拝借した拳銃を盾から取り出す。盾からの物品取り出しは魔法少女として手に入れた能力としては地味ながら、あらゆる場面で効果を発揮する。特にこのような相手の得物を封じたと思っている相手への不意打ちとしての効果は抜群だ。

「待ちなさ……」

言いかけたほむらの言葉が止まる。突如として沸き上がる悪寒。ドクンと一際大きい心臓の鼓動と共にほむらが膝をつく。

「あぁぁ……ぁぁぁぁ」

声にならない声を吐き出しながら、全身の穴という穴より同時に体液が溢れ出る。体中の水分という水分を穴という穴から迸らせながらも最後の力を振り絞り、ほむらは先ほど豪軍(ホージュン)に触れられた胸元を検める。口から溢れ出る血液とも胃液とも判別がつかない謎の体液で衣服を汚しながら強引に衣服を破き胸元をはだけさせる。控え目な胸板にくっきりとドス黒い手形が浮かんでいた。

戴天流(たいてんりゅう)内功掌法が秘奥『黒手烈震破(こくしゅれっしんは)』内家拳士(ないかけんし)の練り込まれた内功によって発せられる勁を体内に撃ち込まれ、五臓六腑を一撃で破壊せしめる必殺の業。

「俺の内功が不十分だったおかげで無駄な苦しみを与えてしまったか。」

豪軍(ホージュン)の肉体は義体へと変わる移行期間であった為に体内の経絡の大部分を失い、あれほどの冴えを見せた内功はかつての三割にも満たない物となっていた。本来ならば、ほむらは苦しみすら感じ

ず主要器官を破壊し尽くされ眠るように死に至っただろう。全身の水分を逆流させるような不細工な結果を見るに絶えず豪軍(ホージュン)はその結果に背を向けたのだ。ほむらが自らの身体から溢れ出した体液で出来た水溜りに倒れ臥す音を聞き取り、豪軍(ホージュン)は悔やむように眼を瞑りながらほむらを見下ろす。

〃それにしても一体この娘は何者だったのだろうか？〃

一流の外家拳士(がいかけんし)でもこれほどの膂力を誇る人間は五指に満たないだろう。ましてやこのような年端もいかない娘が。豪軍(ホージュン)は遠く上海で待つ花嫁に思いを馳せる。義体への移行を開始した豪軍(ホージュン)には文字通り脳に直接情報を送り込み……または記憶のバックアップを取る事により在りし日の瑞麗(ルイリー)の姿を思い浮かべる事すら可能だ。だが、それをせずに生体脳だけを使い花嫁の面影を思い出すのは豪軍(ホージュン)の捨て切れぬ人間としての感傷だろう。

「瑞麗(ルイリー)とさして歳も変わらないだろうに……哀れなことだ。」

視線の先にある死体を見詰める豪軍(ホージュン)の瞳は在りし日の瑞麗(ルイリー)の可憐な姿を思い出していた。結婚式を目前に控えたこの時期に花嫁を置いて遠い日本の地を踏む彼を非難する者はあった。彼の義兄となる孔濤羅(コン・タオロー)もその一人だ。

〃俺だって……こんな事はしたくは無かったさ。だが、それが瑞麗(ルイリー)の望みと言うのならば、狂ってやることでしか俺は彼女を愛する事が出来ない〃

ほむらの死体に瑞麗(ルイリー)の姿を重ねて自責の念に駆られる。言うなれば、この日本行きが最後のチャンスになるのだ。孔濤羅(コン・タオロー)と孔瑞麗(コン・ルイリー)。この兄妹に与えられた最後の機会。

〃濤羅(タオロー)の奴が、もしも瑞麗(ルイリー)の気持ちに気付いてやってくれれば……〃

もしも孔濤羅(コン・タオロー)が妹の気持ちを汲み上げることが出来れば……あの恐ろしい計画を実行に移さずに済む。己の命も、愛しい人の命も、信じた朋友も、忠誠を誓った組織も、何もかも破壊し尽くしたった一人の為に。ただ瑞麗(ルイリー)の為に。それが何をもってしても贖えない大罪だとしても……

〃それにしても……こうなってしまっては日本における商売は頓挫だな。〃

改めて室内を見回すと、ほむらが破壊した射太興業の構成員が無造作に無残な姿を晒している。恐らくは射太興業の主だった人間はほぼここで命を散らしたことだろう。この場に居ない組長の山

崎は命を落とさずに済んだ。しかし未だ服役中である。娑婆の空気を吸えるのは少なく見積もっても1年後。実質的なトップである大西が斃れたことによって、射太興業はその命脈を絶たれたと言っても過言ではない。

〃せっかく謝(ツェ)も連れてきてやったと言うのに……〃

謝逸達(ツェ・イーター)……魂魄量子化(こんぱくりょうしか)の研究にその魂を捧げ、禁忌を犯す事も辞さない姿勢であり続けた結果とうとう学会を追放された狂気の科学者。しかし、彼は逆にその立場を良しとして非合法な手段で試験体を集め、研究を続けた。行えば必ず被験者は死ぬ。悪魔のような実験に嬉々として打ち込む彼を人は「左道鉗子(さどうかんし)」と呼んだ。

その彼を日本に連れてきたのは、豪軍(ホージュン)がこの先に計画している事〃に彼が重要なポジションを占めているからに他ならない。この東方の地で好きな様にその腕を振るってもらうように射太興業に働きかけ、彼の実験体を用意してやろうという事だ。いわば接待だ。

〃とにかく、こうなれば長居は無用だ。謝に連絡を取り、急ぎ上海に戻るのが得策か……〃

まさか女子中学生一人に壊滅させられました……などといった事を射太興業の上部組織や生き残りが信じるとは思えない。嫌疑は生き残った豪軍(ホージュン)にかかることは目に見えている。

部屋から立ち去ろうと、豪軍(ホージュン)が出入り口に向かおうとした瞬間、ふとした違和感を感じて巨大な水溜りに横たわるほむらに注意を向ける。

〃気のせいか……〃

豪軍(ホージュン)の第六感……鍛え抜かれた内家拳士(ないかけんし)としての勘が何かを感じ取ったのか。咄嗟に扉から離れ、部屋の隅に身を寄せるようにして半身を取る。部屋全体を見渡して、現状を確認……する前に異常に気付く。

ついさっきまで豪軍(ホージュン)が居た場所に三発の弾丸が撃ち込まれていた。〃部屋の中〃より扉を射抜き、部屋外へと弾丸が突き抜ける。

〃馬鹿なっ……　この部屋にもう動く人間はいない。〃

豪軍(ホージュン)は慌ててつぶさに部屋を検める。動くものは……いない。いや、一つだけ先程までと変わっている事がある。水溜りにつっぷすように息絶えていた少女の死体が……無いっっ！

〃そんな……馬鹿なっ！確かに息絶えていたはず。功を誤ったか！？いや、そんなはずはない。衰えたと言えども、あれ程の勁を打ちこまれて生きて……ましてや身動きできる人間がいる訳が無い！〃

豪軍（ホージュン）は知らない。今、相対する存在が奇跡によって成り立った魔法少女であることを。魔法少女であるならば、どのような奇跡も可能だ。例え心臓を破壊され、体中の血液を失ったとしても、その心が折れない限り魔法少女は死なない。

〃一度ならず二度までも避けられるとはね。〃

ロッカーの中で身を潜めながら、ほむらは豪軍（ホージュン）の動きを確認する。時間停止を行い、相手が知覚出来ないような射撃を行う。ほむらが魔女との戦いで身に付け、そして実戦してきた必勝の攻撃手段。それが今通用しない。破られた訳ではない。ほむらの時間停止はその能力も依然使用することが出来る。魔力の残量にさえ気を使えば、いずれは仕留められるだろう。

〃でも……流石にあの打撃をもう一度貰うのは御免だわ。〃

肉体の快復にかなりの魔力を消費して、尚完全な状態には程遠い。ましてや肉体強化に魔力を使う余裕などない。

〃こいつに手間取って魔力を浪費しては……今後の行動に支障をきたす事になるわ。〃

ほむらにとってはこのような形での魔力の浪費は絶対に避けねばならない事だった。無限とも思われる程の回数を繰り返すことが許された身といえども、魔力が尽きては終わりだ。グリーフシードが常に潤沢に手に入るとも限らない。それでなくともワルプルギスの夜を迎えるには完全なコンディションをもってしても尚足りぬ。

〃さて、どうした物か……〃

ロッカーの中でほむらが思案に暮れていると、豪軍（ホージュン）が先手を打って動き始める。

「フウウウウ」

一際大きく息を吸い込みまた大きく息を吐き出す。気息を整え、丹田（たんでん）に力が巡るのを感じる。

〃衰えたといえど……あと一度や二度は使えるはずだ。〃

肩幅に足を開き、上半身を寛げ、丹田（たんでん）に意識を集中する。

「呵ッ！！」

蓄えた勁を一息に吐き出す。丹田にて十分に練られた内功は電磁パルスとなって周囲の電子機器に襲い掛かる。戴天流が秘奥『豪雷功』である。照明がパンという音を立ててショートして室内は闇に包まれる。昼間といえど窓の無い密室である。豪軍はその一瞬の隙をつき、気配を察知したロッカー目掛けて猛然と突進する。

豪軍には暁美ほむらがどのような手段を用いて、攻撃してきているかは分からない。こちらから姿を認識できない形で攻撃してくるのならばそれに対する状況を用意してやれば良い。一面が闇に包まれた空間であるならば、条件を五分にまで持っていく事が出来るのではないか。

予想は的中した。ロッカーごと破壊することを目的とした豪軍の右足が見事にほむらを捉える。

ロッカーがある程度の衝撃を吸収したおかげか、致命傷とはならなかったがさしたる魔力強化を行っていなかった身体には深刻なダメージを与えた。豪軍の蹴りによって奇妙な形に歪んでしまったロッカーのひしゃげた扉を強引にこじ開けて、その中より引きずり出されるほむら。

呼吸困難に陥ってもがき苦しむほむらを踏みつけて行動を抑える。豪軍の踵がほむらの胸を強く打つと鯨が潮を吹くように吐瀉物を撒き散らす。吐瀉物に赤い物が混ざる。血液である。豪軍の感じた手応えでは確実に内臓を破壊し致命の一打となっていたはずであった。

だが、またしてもこの女は死なない。何故だ。疑問が豪軍の胸中に渦巻く。ほむらを抑えつつ室内に落ちていた長ドスを拾い上げる。先程勢いよく部屋に入ってきて即座にほむらに排除された若衆の誰かが持っていたものだ。無いよりはマシとはいえ、あまりの安物に豪軍は辟易する。

豪軍は未だもがいているほむらに刃物を突きつけると尋問を開始した。

「貴様は何者だ。何故俺達を襲う？何故致命の一撃を二度も受けて動ける？」

白刃がほむらの首に触れる。冷やりとした感触が身体に伝わり、ほむらはピクリと身体を震わせて動きを止める。

「……あなたに答える必要は無いわ。」

「答えねば。その首を刎ねると言ってもか。」

白刃の先端で首の皮一枚を傷つける。プッと微かな音ともに紅い雫が一筋首を伝う。

「……」

これ以上の尋問となると目か耳を殺ぐしか無い。それでもほむらは答えない。怯えた瞳ではない。死を覚悟した瞳でもない。決意を込めた瞳で睨み返す。

「ならば仕方ない。」

白刃一閃。剣光が閃いた刹那の後、ほむらの首と胴が斬り離された。

「例え君が化生であろうとも、首と胴が分かれても生きられる生物などいまい。」

刃が閃き、返す刀がほむらの胸板に突き刺さる。念入りに心臓を破壊し、止めとし豪軍（ホージュン）は立ち去ろうとする。

室外に出て、建屋内の廊下を数歩進んだところで、はたと足を止める。いや、後ろから何者かに抱き締められている。

〃これは……まさかっ〃

拘束を解き振り向こうとするよりも早く、密着した何者かは豪軍（ホージュン）の背中へ銃弾を撃ちこむ。一発、二発、全弾撃ち尽くした所で拘束を解き、支えを失った豪軍（ホージュン）の身体は地面に向かって斃れ臥す。豪軍（ホージュン）の瞳が最後に見たものは、首の無いほむらの身体だった。

時間停止を行い豪軍（ホージュン）に察知されること無く肉薄。相手を拘束する事により避けえぬ姿勢を取り心臓を撃ち抜く。これがほむらの取った最後の戦術であった。本来首と胴を切り離されれば、脳より神経への伝達回路が断たれる事になり、肉体は機能しない。それを可能にするのが魔法の力だ。ほむらは自らの肉体が首から離れる前に魔力を使い、命令を与えておいたのだ。与えられたプログラムをこなした肉体は最後にほむらの頭部を探し当てると、胴体と頭部を連結させる。

〃思ったより魔力を消費してしまったわ……〃

振り向いてみれば、死体の山、山、山。

〃ここまでする必要があったのか。〃

ほむらの胸に罪悪感というしこりが残った。いかに鹿目まどかを守るためとはいえ、本当にここまでする必要が有ったのか。彼らにも心配する友や家族が居たのだろう。それはほむらが手をかけた他の者も同じなのだ。ちくりと罪悪感が胸を刺す。

〃まどか……辛いわ。〃

辛い時も苦しい時もいつだってまどかの事を考えると耐えられる。
全ては貴女のため。貴女の為ならたとえ地獄に落ちても構わない。
そう思うことだけが、ほむらの心を癒す唯一の手段だった。

◆幕間

桃園から聞こえる音曲にあの時の悲しみの色はもうみえない。弾む音色。喜びを謳歌するかのように朗らかに流れ出る音曲は聴く者の心を春色に染めあげるだろう。

桃園に足を踏み入れた孔濤羅(コン・タオロー)は小さく胸を撫で下ろした。どうやら今日の妹の機嫌は頗る良いらしい。これから瑞麗(ルイリー)に告げる内容と、それを聞いた際の妹の事を思うと胸が痛む。

濤羅(タオロー)が沈痛な面持ちで桃園に入ってくるのを見やると瑞麗(ルイリー)は兄を元気付けるかのように小さく微笑んで演奏を続ける。濤羅(タオロー)は野暮で不器用な男である。それでもこのような時に演奏を止めるような真似はしない。妹が一曲弾き終えるまで静かに座して待つ。瞑目し、耳のみを瑞麗(ルイリー)が奏でる音色に傾ける。

やがて曲が終わり、妹が照れ隠しのように小さく頭を下げる。

濤羅(タオロー)の沈痛な面持ちを見て瑞麗(ルイリー)は何かを察したのか、すっと姿勢を正して兄に正対する。

「瑞麗(ルイリー)……落ち着いてよく聞いてくれ。」

濤羅(タオロー)が思い口を開く。出来ることなら聞かせたくは無い事実だった。

「豪軍(ホージュン)が日本で命を落とした。」

豪軍(ホージュン)の死と射太興業での惨劇は謝逸達(ツェ・イーター)によって青雲幇(チンワンパン)に伝えられた。青雲幇(チンワンパン)の香主(こうしゅ)である劉豪軍(リュウ・ホージュン)の死は幇に大きな衝撃を与えた。寨主(さいしゅ)・李天遠(レイ・ティエンユエン)はすぐさまに孔濤羅(コン・タオロー)に仇討ちを命じた。豪軍(ホージュン)の生体脳に増設されたHDにはしっかりと死の寸前までの情報が残されていたのだ。

「俺は青雲幇(チンワンパン)の道義に則り、必ずこの手で豪軍(ホージュン)の仇を討つ。」

凶手(きょうしゅ)として仕事に赴く際、妹はいつでも悲しい顔をする。先祖伝来の仕事と言えど、他者を殺傷する生業だ。優しい妹が悲しむのも無理は無い。濤羅(タオロー)はこのような時に妹の機嫌を取るような器用さを持ち合わせてはいない。

「すまない。だが、分かってくれ。この仇だけは誰にも討たせる訳にはいかない。絶対にこの俺の手で討たなければいけないんだ。」

共に武の道を歩んだ朋。未来の義弟。濤羅(タオロー)と豪軍(ホージュン)の絆は強い。たとえ青雲幇(チンワンパン)からの命がなくとも、濤羅(タオロー)は旅立っていただろう。

「お願い……兄様……行かないで。」

か細い声を咽喉の奥から絞り出すように吐き出す。瑞麗(ルイリー)の目に

はうっすらと涙が浮かんでいた。
「今度こそ死んでしまうわ。相手は豪軍(ホージュン)様を倒す程の相手なのよ。」
　戴天流(たいてんりゅう)門下における劉豪軍(リュウ・ホージュン)の腕前は濤羅(タオロー)を上回る物だった。濤羅(タオロー)に取ってはいつだって自慢の兄弟子だったのだ。豪軍(ホージュン)こそ国士無双の拳士。戴天流(たいてんりゅう)の免許皆伝は本来ならば豪軍(ホージュン)が受けるべきだった。豪軍(ホージュン)を語る兄の口調はいつだって誇らしげだった。
「これは相手が弱いから戦おうだとか、強いから今回は避けようだとか、そういう戦いじゃないんだ。」
　うつむく妹に一歩近づき、その細い肩に掌を置く。ピクンと一瞬瑠麗(ルイリー)の身体が震える。
「例え相手が悪鬼羅刹であろうと必ず討ち果たさなければならないんだ。」
　触れた掌が熱を帯びたように熱く燃えているのを瑠麗(ルイリー)は感じる。兄の怒りが瑠麗(ルイリー)の心に染み入ってくる。
「分かってくれ瑠麗(ルイリー)。お前の花婿であり、俺の義弟の仇はきっと取ってくる。」
　なんでこんな事になってしまったのだろう。自分の願いは果たされたはずだった。豪軍(ホージュン)との縁談は破談となり、兄と二人の穏やかな時間と関係が取り戻されるはずだった。それが永遠に続くものと思っていた。
　兄の肩越しから見える桃林に、あの白い生き物が紅い瞳を輝かせていた。禍々しく輝く紅い瞳が瑠麗(ルイリー)をじっと見詰めていた。

◆第二章

　ほむらにとって第一に優先すべき事項はまどかの保護だ。彼女の安全と魔法少女への契約をさせないように日夜目を光らせる事が何よりも優先される。その為にはこのように彼女と一定の距離を保ちつつ行動を監視して、キュゥべえや巴マミとの接触を避けつつ護衛するのが最善の策なのだ。

　一時期は率先してまどかと親しくなり彼女との密接な関係の下、ループを超えようとした。しかしそれは徒労に終わった。どうしても駄目なのだ。魔法少女の存在を知ってしまったまどかは危機的状況に陥った際に我が身を擲って契約を遂げてしまうケースがあまりに多い。彼女の性格上仕方の無い事なのだろう。そんなまどかを誇らしく思う。

　今回の時間軸においての第一の躓きは射太興業で大立ち回りを演じてしまった事だ。まどかを保護する為には仕方の無いことではあった。射太興業で受けたダメージは大きくその結果ほむらの行動は大きく阻害された。失った魔力を補填するためのグリーフシード集めに時間を割かざるをえなくなったのだ。その結果として巴マミはお菓子の魔女に敗退した。巴マミがお菓子の魔女に勝利する確率はけして低くは無い。しかし、今回は悪い目が出てしまった。まどかと美樹さやかに遭遇することなく交戦し人知れず散ったのは不幸中の幸いと言える。

　美樹さやかの事もそうだ。美樹さやかが上条恭介という大きな悩みを抱えているのは知っている。美樹さやかが魔法少女として契約を結ぶのはその過程が異なるだけで全て同じ理由だ。この問題を取り除くことは出来ない。仮にさやかを二十四時間監視してキュゥべえの接近を許さなかったら確かに可能かもしれない。しかし、その場合無防備なまどかに契約を持ち掛けないという保証は無い。結果として美樹さやかの監視はなおざりとなってしまう。インキュベーターは叶えがたい大きな願望を持った人間に敏感だ。死に直面した少女、絶望に打ちひしがれ少女、そしてその状況を覆す〝何か〟を待望した時に現れる。奴らは世界のどこにでも居る。美樹さやかはいつだって危ういバランスに直面しているのだ。そしてそれを防ぐ手立てはほむらには無い。インキュベーターの接近を防ぐためには美樹さやかを二十四時間体制で監視するしかないのだ。そしてその選択肢は選べない。

結果として今回も美樹さやかは人知れず魔法少女としての契約を結んでしまった。美樹さやかの気まぐれかまどかに自分が魔法少女となったことを打ち明けていないことは幸いだった。人知れず悪い魔女から街を守るヒーローにでもかぶれているのだろう。しかしそれが鹿目まどかを魔法少女の世界から遠ざけてくれているのならばありがたいことだ。いつまで美樹さやかが持ちこたえてくれるかは分らない。佐倉杏子との接触がうまく作用してワルプルギスの夜まで生き延びることもある。

巴マミの死亡後に佐倉杏子が見滝原市にやってくるのは不可避の出来事だ。縄張りを拡張して安定してグリーフシードを集めるのは佐倉杏子の思考として当たり前過ぎるのだろう。彼女の思考はシンプルに出来ている。それだけに与しやすい。

美樹さやかと佐倉杏子の接触が功を奏す確率は低い。美樹さやかの危険信号を運良く佐倉杏子がキャッチできるか。美樹さやかが佐倉杏子の助けを素直に受け入れるか。拒否されたとしても強引にでも佐倉杏子が美樹さやかを保護するか。パターンはあるが、概ねこんな所だろう。ほむら自身からサポートしても良い。だがほむらが介入するとどうしても上手くいかない。二人とも素直でないのだ。余程うまく気づかれないようにしなければ、ほむらという第三者の手が入ることでより関係を悪化させてしまう。結局は二人にまかせるしかないのだ。

単純な行動故についつい思考が散漫になってしまうが、今はこの幸せを噛み締めなければ。５０ｍほど先に帰宅の道を歩む鹿目まどかを見詰める。幸せだ。彼女が歩くたびにひょこひょこと揺れるリボンで結った髪を見詰めているだけで胸の中に暖かい物が満ち足りる。大切な人が日々を健やかに暮らしている。それこそが何よりの喜びだ。

こちらの気配を悟られまいと姿を隠しつつ尾行を続けるほむらが不意に動きを止めたのは、唐突に何者かの間合いに入っていると感じたからだ。姿は確認できないが、はっきりと背中に視線と殺意を感じた。魔女の気配ではない。魔法少女でもない。ただの人間でありながら、必殺の意志を私の背中に叩きつける存在が確かにいる。街のチンピラやちゃちなやくざでは有得ない。鍛え抜かれた強靭な意志力をひしひしと感じる。幸いまどかの家まではもうまもなくだ。これ以上まどかを見届ける必要は無い。

ほむらは名残惜しむ気持ちでまどかの背中を見送ると、付近の

公園へと足を踏み入れた。辺りを夕闇が包み始め、気の早い電灯が早くも点灯している。ベンチに腰をかけると襲撃者の到来を待った。時を止めて襲撃者を撒いてしまっても良かったのだが、その場合まどかに危害を及ぼすと言外に言っているのは明白であった。ここで決着をつけてしまった方が良い。そう判断しての事だ。

「いい加減に姿を現したらどうなの？レディをあまり待たせるものではなくてよ」

暗闇に向けてよく通る澄んだ声で語りかける。声色に恐れは無い。例え何者であろうとも魔法少女となったほむらを傷つける事はできない。その自信が態度に満ち溢れていた。

「レディというには君は幼すぎるな」

暗闇から姿を現したのは幽鬼のような男だった。ややこけた頬に落ち窪んだ瞳。冷めた表情はまるでこの世の不幸を一身に背負ったかのようだった。長身痩躯を黒い外套で包み、右手に提げるは一振りの倭刀。美術品というにはあまり使い込まれている。それは柄拵えからも明らかだった。

「何の用という問いは無意味ね」

身に覚えが無いとはとても言えない。あれほど派手に暴れたのだ。刺客の一人も送り込まれておかしくないだろう。

「本来ならば言葉を交わすまでもなく斬って捨てるまでだが、それでは朋の思いが晴れぬだろう…」

既にベンチからは僅かに腰を浮かせている。右手はいつでも盾の中から拳銃を取り出して抜き撃つ準備が出来ている。

「青雲幇(チンワンパン)が凶手(きょうしゅ)、孔濤羅(コン・タオロー)。我が朋にして香主(こうしゅ)、劉豪軍(リュウ・ホージュン)の仇を討たせてもらうぞ」

劉豪軍(リュウ・ホージュン)…あの時射太興業の事務所に居た男か。魔法少女となったほむらをあそこまで追い詰めた生身の人間として鮮明に覚えている。米軍基地で武器調達中にうっかり見咎められて米兵たちを相手取った時ですらあれほどの苦戦は強いられてはいない。構えから恐らくは同門の戴天流(たいてんりゅう)であろう。たった一人差し向けられてきたということは、少なくとも腕前は劉豪軍(リュウ・ホージュン)と互角かそれ以上と見ていいだろう。ほむらの背中を冷ややかな汗が伝った。

相手があの劉豪軍(リュウ・ホージュン)と同じ手合いで有るならば、拳銃での遠距離からの攻撃は無意味であろう。不用意な攻撃はこちらの隙を作り出すだけだ。

ほむらが左腕の盾を操作すると、世界は動きを止める。魔法少

女暁美ほむらが持つ固有の能力、時間停止だ。いかなる存在も逃れる術の無い無敵の能力である。
ほむらは左腕の盾に収納された拳銃を取り出すと正確に照準を合わる。狙いは胴体部。胸と腹だ。一撃で相手をし止めるには頭への射撃が適切とも取れるが実際にはそうとも限らない。頭部というのは動きが大きい。対象の僅かな動きのために弾道が逸れる恐れがある。また曲面の多い頭蓋骨はそれだけで被弾経始の役割を果たす可能性が大いにある。それ故にほむらは人間との戦闘時は動きの少ない胴体部に狙いをつける。重要臓器を失えば、長期の戦闘は不可能だ。あとは動きの止まった対象の頭部に一撃を加えて始末しても良い。距離をとって徐々に対象が弱るのを確認しても良い。
ほむらは射出位置を変えて左右から同時に襲い掛かるように銃弾を配置すると、時間停止を解除する。再び世界は時を刻み始める。
突如として現れて眼前に迫り来る弾丸に濤羅は両腕を交差して頭部への直撃を避ける。濤羅が纏うコートはケプラー繊維で編みこまれている。重量が嵩むのが玉に瑕だが、銃撃に対する剛性には保証がある。本来は戴天流（たいてんりゅう）の身のこなしを阻害する装備は避けるべきである。しかし豪軍（ホージュン）を倒した事実が濤羅に備えを選択させた。銃弾はコートによって遮られ、衝撃は濤羅の鍛えられた肉体によって威力を封じられた。
着弾を確認したほむらの一瞬の気の緩みを濤羅は見逃さなかった。裂帛の気合と共に抜き払われた濤羅の倭刀が横薙ぎに鞘走る。ほむらは後方に飛び退くと改めて照準を濤羅に合わせる。しかし、ほむらにはそれが出来ない。ほむらの右手は手首から先が失われ、拳銃を握り締めたままの状態で先ほど立っていた位置に置き去りにされていたからだ。
「しまった…」
代わりの武器を盾から取り出そうとするも手首から先が無くては取り扱うことが出来ない。ほむらが右手首の止血に意識を映すその一瞬の隙に濤羅はほむらの背後に回りこんでいた。失われた右手で背面へと振り払う。濤羅への目潰しの役目を果たすかと思われた溢れ出す血しぶきは無残にも虚空へと飛び散った。低く身を沈める朴腿式の構えを取った濤羅の後掃腿がほむらの両足を刈り取る。ほむらは尻餅をついて倒れこむ。慌てて立ち上がろ

うとするほむらの前に濤羅の白刃が突きつけられた。

「貴様を殺す前に聞いておく事がある。何故豪軍（ホージュン）を殺した。」

劉豪軍（リュウ・ホージュン）と暁美ほむらに関係性は無い。利害関係も怨恨も無い。少なくとも豪軍（ホージュン）に殺される理由など無いはずだった。

「鹿目まどかに触れようとしたからよ」

「鹿目…まどか？」

聞き返したその次の瞬間には目の前にいたはずのほむらは濤羅の間合いからは離れていた。時間を停止しての離脱である。

「今日はこれで退くわ。覚えておくことね。私と鹿目まどかを害しようとするならば、次は全力でお相手するわ」

次の瞬間にはほむらは目の前から消失していた。時間を停止しての逃走術など濤羅に追う術は無い。

一人残された濤羅はトカゲの尻尾のように切り落とされたほむらの右手首を検める。切断面から真っ赤な血が溢れ、骨の白さとそれを包む肉は赤い。まっとうな人間の肉体である。少なくともチタン製のフレームを合金のプレートで覆って駆動している外家拳法家のサイバネボディではない。生身の人間が持つ脆弱な肉と骨の身体だ。数多のサイバネ外家拳法家を屠ってきた孔濤羅（コン・タオロー）にして不可解極まる逃走である。自分の間合いに入った獲物をこうもとり逃すとは濤羅の凶手（きょうしゅ）として経験では初めてのことだった。

「本当に仙術使い…なのかもしれない」

豪軍（ホージュン）の最期から敵が何らかの術を使っているのは予想が出来ていた。しかし相対してもここまで不可解だとは思っていなかった。生身の肉体でありながら、義体を上回る生命力。致命傷と思われる攻撃を受けても動き回る肉体。視界に現れては消える不気味な戦闘方法。

「仙術であるのならば、どのような奇跡をも可能なのか？」

御伽噺のように聞かされた過去の達人の伝説を思い起こす。伝説では身体を羽毛の如く軽くして空を飛んだだの、天地自然と一体となることに成功しただの、果ては山を崩し、河の水を逆流させるなど絵空事のような伝説の数々を聞かされたものだ。それらの多くは駄法螺であり、少なくはトリックである。それは同じ内家拳でも数多く目にしてきた。しかし、その中に本当に仙術使いがいなかったと誰が言い切れようか。ましてや世の常の理を超えた武術である戴天流（たいてんりゅう）を修めた孔濤羅（コン・タオロー）には必ずしも超常の存在を頭から疑う程の頑迷さは無かった。それよりも目の前で起こった

事実をありのまま受け止める柔軟さを示した。

　秘密の鍵は濤羅にしても避けえぬ他方向から一斉に襲い来る銃弾だった。射太興業から回収された監視カメラと劉豪軍（リュウ・ホージュン）の視覚履歴の映像からは分からない情報がそこにはあった。殺意である。戴天流（たいてんりゅう）を修めた濤羅にはそれが感じられる。一度間合いに入った対手から発せられる殺意を見咎めるなどという事が起こりえる筈がない。仮に予備動作を極限まで削り無拍子となるまでに鍛えられた術を持ったとしても、意を消すことは難しい。相手を倒すという意識は脳の反射よりも早く対手を撃つのだ。戴天流（たいてんりゅう）はそれを感知して敵を打つ。いわば予備動作などは下の下のレベルなのだ。その濤羅にして感じ取れない程の忽然と現れる攻撃。その割には単純な足払いにも対応できない体術。

「何らかの術を使っているのは明らかだ。」

　もう一つのヒントとなるのは、銃声だ。ほむらが他方向から攻撃を行う際、常に銃声は一つなのだ。例え銃弾が何発であろうとも。射手が複数居るわけではない。仮に仲間がどこかに潜み援護射撃を行っているとしたら、濤羅ならば容易に感づくだろう。何よりほむらが危機に陥った際に救援しない訳がない。一人で同時に他方向から攻撃を行う。

「そう…まるで時を止めたかのような…」

　あまりに馬鹿馬鹿しい考えだが、そう考えれば合点がいく。複数の弾丸が一発の銃声の元に他方向から飛来するのも、己の間合いから知覚されずに逃げ果せるのも全てはそれで説明がつく。

「死なない肉体に時を止める仙術か…相手にとって不足無し」

　例え相手が何者であろうとも討ち果たすまでは生きて帰らずと誓ったこの身だ。次の機会こそ必ず討ち果たす。それだけが亡き朋と祖国で待つ妹への手向けとなろう。

■■■■■■

濤羅ほどの凶手（きょうしゅ）になれば一般家庭に忍びこむなど造作もないことだった。暁美ほむらを誘い出す好餌として誘拐った娘を小脇に抱えて夜の街を進む。一般人を戦いに巻き込むなど侠の精神に反するのではないのかという葛藤はあった。だが、それを守っていたのでは魔法少女には勝てない。まともな相手ではないのだ。確実に対手を誘い出す餌が必要だった。

人目を避けて工事中の幹線道路を選ぶ。行き先は射太興業ビルである。先を急ぐ濤羅の進路に人影が立つ。
「ちょっと待ちなよ。その子はあたしの友達なんだ。おじさんみたいな人には連れて行かせる訳にはいかないね」
そこには短髪の活発そうな女子学生が立っていた。両手を広げてこちらの進路を塞ぐ様に立ちはだかっている。美樹さやかがこの場に居合わせたのは偶然としか言い様がない。夜の見滝原をパトロールしている彼女にしても、ほとんど人通りのない工事中の幹線道路を通りかかったのはただの気まぐれだ。
「まどかを置いてさっさと立ち去りな。今なら見逃してあげるわ」
自信満々の口調で言い放つ少女を無視して歩を進める。少女の目の前で立ち止まり一拍呼吸をおく。少女は広げた両手で抱きこむようにこちらを捕らえようとする。スッと屈んでその両手を避けて、そのまま片手で両足を払う。地から離れた少女の体を空中で手を加えてもう一回転。このまま遠心力を生かして頭から地面に叩きつければ即死だが、無益な殺生をするまでも無いだろう。力量の差を見せつければ追ってはこまい。あとは軽功を駆使して撒いてしまえば良い。少女の頭が地面に垂直となった瞬間を見逃さず再び手を加えて両足を揃えて着地させる。呆気に取られて立ち尽くす少女の頭を軽く撫でるとそのまま足早に歩み去る。
五歩ほど進んだ所で再び少女から声をかけられる。
「ま待てって！もう一度言うよ・・・あたしの友達から手を離しな。さもないと…」
幾分上ずった声は今自分が何をされたかを理解していることを示すには十分だった。瞬間的に生殺与奪を握られたことくらいは理解をしているようだ。しかし、それでも向かってくる。それほどこの娘が大事なのか。少女を一瞥すると濤羅は無視して歩を進める。
「魔法少女さやかちゃんが許さないんだから！」
さやかがソウルジェムを取り出すと蒼白い淡い光が溢れた。濤羅が眩しげに目を細めた一瞬の後、そこには白いマントに青の魔法少女服に姿を変えた美樹さやかが剣を構えていた。
「魔法少女…か」
呟くと濤羅はコートを脱いで路面に敷くとその上にそっとまどかを横たえる。
「まどかを離してくれた事は感謝するよ。だからといって見逃さな

い。誘拐なんてする悪党はこのさやかちゃんがとっちめてやるんだから」
切っ先をこちらに突きつけてまくしたてるさやかに濤羅はチラリと視線を向ける。足捌き、剣を持つ上体、こちらに向ける視線の全てがさやかを素人と断定するのに足る証拠を示していた。何よりさやかに自覚が無い。濤羅の間合いに足を踏み入れていると いう自覚が欠如している。隙だらけだ。暁美ほむらに感じた威圧感が無い。同じ魔法少女と言っても個体差があるのだろうか。濤羅はさやかの剣先を抑えるように片手を突き出す。
「待ったなしだよ？今更謝ったって遅いんだから」
剣を引き肩に乗せてポンポンと弾ませながらさやかは答える。弛緩した表情だ。およそ戦いに赴く者の顔とは考えられない。
「五手だ。五手まで貴様の攻撃を許してやろう。それでも向かってくるというのなら、こちらも容赦はしない」
幾分か緊張感を取り戻した表情でさやかは構えなおす。
「五手もいらないね。一撃で今の言葉を後悔させてあげるよ」
話し終えると同時にさやかは疾風のように斬りかかる。およそ五m以上あった間合いを瞬時に詰めると上段に構えた剣を振り下ろす。もしも傍で見ている人間が居たとしたら青い閃光が一筋駆け抜けたかのような瞬速の打ち込みだ。確実に目標を捉えたと思われたさやかの視界から濤羅の姿が消えていた。空振りだ。
「どうした。こっちだぞ」
背後からの声に後ろに回られた事に気づく。振り向きざまに横薙ぎに振り払う。触れただけでも濤羅の身体を両断しかねない豪快な一撃はまたしても空振りに終わる。さやかは濤羅に向き直り構え直す。声の位置からして自分の直ぐ後ろにいると思われた濤羅ははるか前方にいる。あの一瞬で間合いを開けたのだ。
「だったら…これならどうだ！」
極端な前傾姿勢を取ったさやかはそのまま駆け出すと濤羅の脇を抜けて疾走する。魔法少女の力で身体能力を極限まで高めて人知を超えた速さを持って敵を斬るのがさやかの常套手段だ。その力を引き出せば音速の壁に限りなく近づくことすら可能だ。知覚を超えた高速移動による瞬速の斬撃。何匹もの使い魔や魔女を相手にして戦った技が濤羅を襲う。
幾筋もの青い閃光が濤羅の周囲を駆け抜ける。死角から死角へ

と姿を移し濤羅を狙い打つ。背後から肩口を狙い袈裟がけに打ち込む。上半身を軽く捻って避わされる。正面に回りこみ、低い体勢から足首を狙うように薙ぎ払う。後方に軽く飛び退いて避わされる。正面から上段を振り下ろし、下段から切上げ、腕を狙って振り払う。その全てが虚しく宙を切った。

「今の一連の攻撃は一手としてやろう。残り二手だ」

怒りよりも焦りがさやかの胸中を渦巻く。こんなことは有得ない。自分は魔法少女になったはずだ。無敵のヒーローに生まれ変わったはずなんだ。それがただの人間の男に翻弄されるなんて有る訳が無い。

さやかがさっとマントを翻すと足元に八本の剣が突き刺さる。さやかの振るう片刃の剣とまったく同じ拵えだ。踊るように軽くステップすると足元の剣を次々と濤羅に投擲する。さやかの使用する片刃剣の質量は凡そ二キロ。それだけの質量も魔法少女の膂力を持って投げられれば短刀よりも弾丸よりも尚早く濤羅に襲い掛かる。濤羅は軽く溜息をつくと半身を逸らして避ける。軸足をずらす僅かな動きをのみで全ての投擲を避ける。

「まるで外家の力馬鹿だな。まるでなっちゃいない。残り一手だ。本気を出せ」

さやかは空高く跳躍すると再び片刃剣を数本出現させると、それを一斉に濤羅へと投げつける。さらに自身も一筋の閃光と化して濤羅へと打ちかかる。高速移動と投擲を組み合わせた連続攻撃だ。間合いを取っては剣を投げつけ、その剣を追い越すかのようなスピードで濤羅に肉薄して斬りかかる。

濤羅は自身に接近する剣のうちさやかが突進してくるルート上にある剣だけを払い落とす。尋常でないスピードで迫り来る刃を掌底で寸分違わぬタイミングで叩き落す。突進中に突如として射線を塞がれたさやかは慌てて急制動し、迂回して濤羅を狙う。濤羅の周囲を旋回するように移動しながら次々と剣を投げつける。全てが命中すれば濤羅は針鼠のようになって息絶えるだろう。仮に全て回避されても一瞬でも隙を作れば今度こそさやか自身の攻撃で討果たせるだろう。今度こそ必勝の予感にさやかはほくそ笑んだ。

死角からの攻撃にも濤羅は焦ることなく対応した。死角からの攻撃といえど、攻撃の意を感じることは出来る。どんなに速い攻撃でも、死角を衝こうともそこに来ると分かっているのならば避

わすことは容易い。左後方から飛来する剣を叩き落とすと、空中で回転する剣を次に飛来する剣に向かって蹴り返す。剣と剣が空中でぶつかり弾け合い剣の弾幕に間隙を作る。濤羅はその隙を見逃さず隙間に身体を滑り込ませる。

「そんなっ！？」

我が目を疑う光景にさやかは驚愕する。だが、それでもさやかは諦めず突貫した。さやかは正面衝突の衝撃に備えるべく身を引き締める。だが手応えを一向に訪れず濤羅を置き去りにして駆け抜けた。

「くそっ！今度こそっ」

振り向いて再び打ちかかろうとしたさやかが大きく態勢を崩す。腰を捻り振り向こうとしたが、下半身がついて来ない。それもそのはずだ。さやかの左足は膝下から切り離されて直立していた。

「ぎゃああああ」

絶叫が木霊する。魔法少女は基礎性能によって痛覚の緩和はなされている。しかし視覚からの情報から想起される刺激はあまりに大きい。

「足がっあたしの足がっ」

濤羅が刀を抜いた瞬間すら見えなかった。さやかの攻撃を身を沈めてかわした濤羅はそのまま抜刀して左足を斬った。状況から推察するにそれ以外に有得ない。

さやかは自分の視界が暗くなっていくのを感じる。急速な流血によるブラックアウト現象だ。薄れ行く意識の中、手探りで左足を探す。キュゥべえから聞いた話では魔法少女の自然治癒能力は極めて高いそうだ。手や足くらいならば多少傷つけられても勝手に治る。あの巴マミだって、頭を切り離されても直ぐに処理すれば無事だったかもしれないとの事だ。その時はなんて理不尽な話だと思ったが、今はその理不尽な能力に頼るしかない。

血まみれの地べたを這いつくばって左足を探す。幸いそれほど離れた場所に有る訳では無いので直ぐに見つかった。鮮血で赤く染まった左足を切断面にぴったりと合わせる。

「ふぅこれで・・・何とか」

ほっと一息つくさやかはすっかり忘れていた。今が戦闘中であり、対手が依然として健在であることを。

血だまりでもがくさやかを静かに見つめながら、濤羅はゆっく

りと呼吸を整える。必殺の一撃を加える下準備である。さやかの首筋に手をかけながら語りかける。

「まだ俺にはお前らが外家のサイボーグどもの同類という疑いが捨てきれない。だからこれではっきりさせて貰う」

濤羅が一息吸い込む。取り入れられた呼気が丹田を巡り勁を練り上げる。内功によって練り上げられた勁は電磁パルスへと変換され濤羅の掌から一気呵成に放出される。これぞサイボーグボディに対抗する為に編み出された内家拳法が秘奥。サイボーグに残された生身の脳のみを焼き尽くす殺戮の絶技。電磁パルスは脊髄から侵入し、さやかの頭蓋内で荒れ狂う。

「戴天流（たいてんりゅう）内功掌法裏奥義…紫電掌（しでんしょう）…」

サイボーグならばこれで仕留められる。もしこれで立ち上がってくるならば、それはサイボーグでも生身の人間でもない。もっと恐ろしい何かだ。濤羅は残心を取ると注意深く間合いを取った。さやかの耳から沸騰した液体がどろどろと溢れ出す。それはさやかの脳内が完全に沸騰し脳が焼け切れた事を示すものであった。

魔法少女に死が訪れるとしたら、それは己の死を悟った時に他ならない。ソウルジェムの効果により常時戦闘に向けて万全の態勢を取れるように調整されている肉体は例え損傷しても自然治癒される。故に死を自覚しない限りはその肉体が活動を止める事は無い。では死を自覚していないのならばどうなるか。ソウルジェムは持ち主に安穏な死に至ることを許さない。美樹さやかは癒しの願いによって誕生した魔法少女だ。その肉体の回復スピードたるや恐ろしい物がある。

濤羅は見た。己が斬った少女の左足が見る見る内に回復していく様を。先程まで溢れ出していた鮮血はとうに止まっていた。切断面は既にぴったりと合わさってこんもりとした肉が盛られている。まるで定点カメラで撮影された映像を早回しで見ているかのような不気味な現象であった。まさに魔法と言えた。

「怪物め…」

目の前で起こる超常現象に冷静さを失う濤羅では無かった。何かあるはずなのだ。この怪物を倒す方法が。豪軍（ホージュン）の記憶では暁美ほむらは首と胴を切り離されても生きていた。で、あるならば脳を焼き尽くしても死に至らないのは道理である。

さやかはゆっくりと起き上がると二、三度首を振る。自分の脳が先程焼き尽くされたなど想像も出来ないのだろう。ほんの僅か

の間失神していたと思っているのだろう。
「あ、あたしの足・・・着いてる。なら、まだ勝負はこれからだよ」
　新たに出現させた剣を取り、中段に構える。闘争心に燃える瞳が真っ直ぐに濤羅を射抜く。先程までの戦いでいくら鈍感なさやかといえど、実力の差は痛感していた。だからといって見過ごす訳にはいかない。今、自分の目の前で拐かされようとしているのは自分の大親友なのだ。例え負けるとしてもまどかだけは取り戻す。その気持ちがさやかの足を前に進ませる。斬られる恐怖を、死の恐怖を乗り越えさせる。
　さやかは更にもう一本剣を現出させると二刀流の構えを取る。二刀流の心得などさやかには無い。ただ、このまま同じ戦法で戦っても勝ち目が無いことだけは理解していた。言わば苦し紛れだ。
　恐怖を振り払うように一声吼える。咆哮とともに突貫。風を巻いて濤羅に向かって打ち掛かる。魔法少女としての能力を最大限に活かして両手でのラッシュ。一刀で避けられるのならば、二刀で掛かれば手数は二倍だ。とにかく早く、速く、疾く、濤羅が打ち返せないほど速くそして相手が避わしきれない程に撃ち続ければいつか当るはずなのだ。当たりさえすればただの人間の身体など木の葉のように両断できるだろう。
　さやかの剣は剣術とは言えないレベルのものだ。教えを受けて習い覚えた物ではない。魔法少女となり魔女との戦いとの中で磨かれ編み出した物だ。野獣の闘争本能のような出鱈目な剣捌きに濤羅は困惑した。凡そ剣術の基礎とは縁遠い太刀筋だ。それ故に読み難い。先程までの素人ながらも剣術の型を追うような生優しい物ではない。剥き出しの闘争本能を力任せに打ち付けてくるような剣である。ただの素人が棒きれを振り回している訳ではない。魔法少女の膂力で振り回す二刀はその一撃が致命の一刀となり得る。
　さやかが次に振るう一刀の意を濤羅は読み取れる。しかし、その次の行動が予想できない。さやかの型に嵌まらぬ野獣の剣は濤羅の常識の埒外にあるのだ。嵐にように荒れ狂うさやかの二刀に対して濤羅は倭刀一本で立ち向かう。さやかの鬼のような膂力に対してまともに受太刀をしては刀を折られる。濤羅は力を受流す様に絡め取る。さやかの打ち込みに対して弾き返すのではなく、受流す。あるいは勢いを加えて素通りさせる。これぞ戴天流（たいてんりゅう）剣法が秘奥「波濤任櫂（はとうにんとう）」軽きを以って重きを凌ぎ、遅きを以って

速きを制す。中国武術内家拳が極意なり。

さやかの連撃は既に人間の限界を超え五分間にも渡って続いていた。濤羅は依然として波濤任櫂（はとうにんとう）の構えを持って巧みに受流す。さやかの執念は濤羅を圧倒したかに思えた。一方的にさやかが押し捲り、いずれは濤羅が防ぎ切れずに一撃を食らい果てるか。はたまたその刀を破壊されてその身を両断されるか。さやかの脳内が思い描く勝利絵図はその二つに集約されていた。さやかの限界を超えた肉体駆動に先に悲鳴をあげたのはさやか自身の精神の方だった。

何故、こいつは倒れない。何故、あたしの動きについてこれる。普通の人間ならば、魔法少女でない人間ならば、ついてこれる訳が無い。それでは魔法少女になったあたしは何なのだ。ただの馬鹿じゃないか。さやかの集中力が乱れる。それを見逃す濤羅ではなかった。さやかの攻撃が緩む一瞬の隙を衝いて、真っ直ぐに上段を突く。さやかの振り下ろされた上段を半身になって避わすと、片手にてさやかの左目を抉る。真っ直ぐに打ち込まれた濤羅の一刀は狙いを過たずさやかの眼球を貫き、眼底を破壊して、脳幹を確実に貫いた。生身の人間ならば即死の一撃である。

「これくらいでえええ」

左目から刀を生やしたままさやかは二刀を振りかぶる。驚愕が濤羅の行動を一瞬遅らせた。即座に剣を引き抜くと同時にさやかの振るう剣を半歩下がって避ける。そこをさやかの伸びやかな横蹴りが追撃した。濤羅の身体は中央分離帯を越えて反対車線のガードレールに叩きつけられる。力のベクトルが後方に働いた事が致命の一撃となる事を防いだ。

ガードレールを背に咳き込む濤羅にさやかが襲い掛かる。濤羅は峨眉万雷の構えを取るとさやかを迎え撃つ。四足獣のように低い姿勢でさやかは突進する。猫科の猛獣が獲物に襲い掛かるかのようなさやかの二刀を濤羅は斬って落とす。瞬時に両手両足の腱を断ち、頚動脈をも切り裂く神速の斬撃。

さやかの動脈からは噴水のように血が溢れ出している。少なくともこの血が溢れ続けている間は動けないだろう。ガードレールにもたれかかると濤羅は荒い息を吐く。呼吸を整える時間くらいは貰えるだろう。濤羅は素早く、調息、閉息、練気の工程を終える。

「本当だ…身体中の血を抜かれたって闘えるんだ…」

ゆらりと立ち上がったさやかの目の焦点は合っていない。左目の再生は既に終わっている。先程まで溢れ出していた血もみるみる内に止まっていく。癒しの魔法少女の能力は伊達ではない。

濤羅は困惑していた。一体どうすればこの生物を倒すことが出来るのか。迷いが剣を鈍らせる。さやかが間合いに侵入するのを許してしまう。濤羅にとっての最善手はさやかが間合いに侵入する瞬間に迎撃態勢を取り、後の先を取ることだ。近接されて無軌道なさやかの攻撃に付き合う愚を二度も犯すのは避けたかった。再びさやかの連撃が始まる。息をもつかせぬ連続攻撃。そのどれもが致命の一閃であり、一度受け損ねれば濤羅の身体を軽々と両断するであろう。

濤羅は怒涛の連撃をひたすら耐える。

〝急所への一撃が駄目ならば…手足を殺いで動きを封じるまでだ…〟

振り下ろされるさやかの右腕を濤羅は紙一重で避ける。避けたと同時にさやかの上腕を断つべく濤羅の刃が奔る。肉を断つ手応えを濤羅はしっかりと感じ取る。だが、剣先がさやかの腕から離れない。

「かかったね…！」

さやかはニヤリと口元を歪めて焦点の合わない瞳を濤羅に向ける。刀が皮を破り、肉を切り、骨を断つ。そのコンマ数秒にも満たない瞬間の出来事だった。断ち切られるはずだったさやかの腕が瞬時に再生を始め、濤羅の刀を絡め取った。

「馬鹿なっ…斬られながら再生を始めるだと…！」

濤羅が現状を把握するよりも僅かに早くさやかの左手の剣が濤羅のがら空きの胴を突くべく動き始める。剣先が肉を抉るよりも早く濤羅はさやかの右腕に絡め取られた刀を捨て素手での迎撃を試みる。さやかの豪腕によって振るわれる刺突を体を入換ながら右腕一本の捻勁で後方に逸らす。自らの強力に捻勁加えられたさやかは引き寄せられるように一歩濤羅へと近づく。態勢を崩しつつも刀の生えた右腕を濤羅めがけて振り下ろす。ここまで近接すれば剣の間合いではない。だが、そんなことはさやかには関係ない。さやかの膂力を持ってすれば、その腕が身体のどこかに当たりさえすれば必殺の一撃となるのだ。今まさに脳天を打ち砕かれる寸前でも濤羅は冷静だった。一息吸い込むと濤羅の左掌が紫電（しでん）を纏う。

「呃啊！！」

気合と共にさやかの腹部を濤羅の左掌が撃ち抜く。本日二度目の紫電掌である。濤羅は両足に力を込めて靠勁を持ってさやかを吹き飛ばす。

〝手応えが確かならば、重要臓器を焼き払ったはずだ…〟

残身を取り吹き飛ばしたさやかの身体を見詰める。そこには白のマントに身を包んだ少女の姿は無く、学生服の少女の動かぬ肉体が転がっていた。濤羅は慎重に間合いを詰めると少女の身体を検める。少女は先程まで激闘を繰り広げていたさやかだった。

〝どういうことだ…あまりにあっけない…〟

呼吸、脈拍、瞳孔反応全てがさやかの死を示していた。紫電掌を叩き込んだ腹部を検める。濤羅はさやかの右腕から刀を引き抜くと、切っ先を腹部に突き入れる。どろりと垂れる内容物は高熱によってどろどろに溶かされた臓器の証だ。紫電掌による功は成っている。しかし…

〝仮に臓器が破壊されたとしても、人間は即死するだろうか〟

当然、そんな事は無い。数々の経験によって濤羅にもそれは分かっている。

〝思い出せ。こいつの腹部に何があったかを。何か…何かがあったはずだ〟

濤羅は改めてさやかの遺体を調べる。紫電掌以外に致命の一撃となる要因があったのではないか。靠勁によって吹き飛ばした際に頭を打ったか。そもそも脳を焼き尽くしても復活する生き物が少々の打撃で倒せるだろうか。丹念に身体の各部に触れて外傷、内傷を問わずに調べる。やはりどこにも活動を停止する程の傷は見つからなかった。

〝むしろこれは…紫電掌が決まった瞬間から肉体の再生が止まったかのような…〟

斬られた腕を瞬時に再生し、刀を奪い取るほどの超性能を見せたのだ。内臓器といえど再生には然程の時間を要さないだろう。さらにさやかの身体を調べると不思議な物体を見つけた。

〝これは…何だ…何かの装飾品か？〟

それは砕けたソウルジェムの台座だった。濤羅の紫電掌によってソウルジェムを砕かれたその残骸。砕けたソウルジェムは霧散したが、台座部分のみは残されていた。

〝思い出せ。この娘が魔法少女となった時を。あの時に取り出し

た宝石が確か…〟
全てが濤羅の脳内でつながる。さやかの腹部にあった青い宝石…魔法少女に変身する際に取り出した青い卵状の宝石…そしてさやかの遺体から見つけられた台座部分。
「そうか…これが奴らの弱点だったのか…！！」
濤羅の哄笑が闇に木霊する。必勝の予感が濤羅の胸に満ちた。もう何も恐れることはない。

■■■■■■■■■■■■

姿を消した鹿目まどかの携帯が鳴ったのは翌日だった。暁美ほむらは鹿目まどかが姿を消したことを確認するとまどかの携帯を盗み出し、連絡を待った。通話はごく短い言葉のみだった。
「射太興業ビルで待つ」
この一言で相手が何者かも、何の為にまどかを誘拐ったのかも全て理解した。まどかの無事を確認する必要などはない。敵を倒し、救い出すだけだ。射太興業で待つのは間違いなくあの男だろう。ほむらは自分の右手をじっと見る。そこには失った右手を補うための義手がはめられていた。
もう孔濤羅（コン・タオロー）を甘く見るつもりなど無い。時間停止したまま突入し、濤羅を見つけて始末する。ほむらは時間を止めると、正面玄関から射太興業ビルに足を踏み入れた。
射太興業ビルの一階には窓が無い。これは多くの非合法稼業に従事する人間の持ちビルに共通することである。射太興業ビルは一階の大部分を駐車場として使用している。正面玄関を抜けると、吹き抜けとなっており階段を昇ると受付がある間取りとなっている。ほむらの肉体に異常が現れたのは階段を中程まで昇った辺りだった。突如として動悸が激しくなる。呼吸が荒れ、視界が揺れる。
「かっ…かはっ…これは……毒…しまった」
最早立っていることすら困難だった。神経がバラバラに分解されるような痛みと共に全身が麻痺していく。階段を下りて屋外へ逃れるか、上って二階の窓を開けるか。即座の判断を迫られる。躊躇いは死に繋がる。ほむらは痺れる手足を懸命に動かし這いつくばって階段を昇る。毒ガスはその用途から空気よりも重い必要がある。一階まで降りて動けなくなる可能性よりも、例え待ち伏せ

される危険があるとしても二階に上ることを選んだ。時間停止を解除すると共に、肉体の快復に魔力を回した。芋虫のように這いながら一段ずつ進むほむらの姿にはいつもの余裕も優雅さの欠片も無い。ただ執念のみがあった。こんな事では死ねない。まどかを救い出すまでは絶対に死ねない。その一念のみが致死量を遥かに超える毒による意識の消失を防いでいる。細胞が一つ一つ壊死していくかのような痛みに耐え、口から吐瀉物を零しながら何とか受付を抜けて扉を押し開ける。

二階廊下を注意深く観察する。二階奥まで続く廊下の右手には窓があり、左手はいくつかの部屋で区切られている。恐らくは応接室だろう。廊下の奥は階段となっており、上階と下階の駐車場との行き来が出来るようになっているようだ。濤羅の姿は無い。上階にいるか、二階の小部屋のどこかにいるかは分からない。一つずつ部屋を開けて調べている余裕は無い。じりじりと体力と魔力が消耗していく現状では一刻も早く新鮮な空気を吸い込み肉体の快復を計るべきだ。魔力の行使を快復に専念させたおかげか、何とか立ち上がる事が出来たのは幸いだった。少なくとも平静を装う程度には肉体が快復出来たのだ。

半ば麻痺した手足を必死に動かして這い進む。毒の抜けきらない頭をふらふらとさせて窓枠に近づいていく。平静を保とうと頭では命令を下していても肉体は言うことを利かない。もしも平時のほむらであったなら気づいたであろう。外気を取り入れようと窓枠に手をかけたその時であった。

「があああああっっ！」

窓枠に仕掛けられた高圧電流の罠がほむらを襲った。

〝まずい…手を離さないと…〟

思考とは反して肉体はほむらの指示を受け付けない。人間の反射の問題である。高電圧に触れた際に筋肉は収縮する。ほむらが手を離すよりも早く死神が窓の外に現れる。上階に待機していた濤羅がロープを使って振り子の要領で突入してきたのである。防弾ガラスを突き破り、紫電（しでん）を纏った濤羅の右掌がほむらのソウルジェムを打ち砕かんと真っ直ぐに突き出される。

濤羅が防弾ガラスを突き破る寸前にほむらは魔力によって自らの肉体を操作する。脳からの信号が神経を伝って肉体を動かすのは不可能だが、魔力によって強制的に操作することは可能だ。左腕に盾を顕現させ、濤羅の紫電掌（しでんしょう）をガードする。濤羅の紫電掌（しでんしょう）

とほむらのシールドが激突し、火花を散らす。ソウルジェムの破壊という最悪の結果は防いだが、突入してきた勢いを殺すことは出来ず、ほむらは後方に吹き飛ばされる。

〝ついてるわね…今の一撃が最大のチャンスだったと言うのに…このまま時間を停止すればこちらのものよ〟

吹き飛ばされた勢いをそのままに応接室に転がり込みながらほくそ笑むほむら。例え毒に冒されようと、感電によるダメージがあろうとも、時間を停止してしまえばそれで終わりだ。濤羅との戦いは奇襲を如何にして防ぐかが重要だった。その意味では毒ガスと高圧電流という罠は時間停止の盲点をつく効果的な罠だった。だが、それも終わりだ。距離を取って時間を止めさえすれば、有りったけの爆弾を使って決着をつけられる。

ほむらが左腕の盾を操作すればいつもの通りに時間が停止し、それで全てが終わるはずだった。

〝な…そんなっ馬鹿な。時間停止が発動しない！？〟

慌てて再度操作するも結果は同じ。盾は沈黙を保ったままだ。紫電掌(しでんしょう)による電磁パルスの影響か。それとも毒による何らかの影響か。原因は分からない。少なくとも今はそれを解明している時間は無い。

〝拙い…濤羅が来る。時間停止無しで戦うのは無謀過ぎる。とにかく距離を取らなきゃ…〟

幸い盾からの物質取り出しは可能だった。ほむらは軽機関銃を取り出すとドアに向けて構える。

〝いや…駄目だ。軽機関銃程度では倒せない。飛び道具が通じる相手とはとても思えない〟

軽機関銃ならばこのビル程度のドアも壁も紙のように貫通する事が出来るだろう。だが、それが当るかどうかと言えば別問題だ。相手は時間停止後に目の前に現れた弾丸の直撃すら避けるような化け物だ。

〝それなら…こっちね〟

ほむらが新たに選択した武装は対戦車無反動砲だった。ほむらはそれをドアの方角に向けて構えると砲口を斜めに下げて発射する。轟音と共に射出され、ほむらの狙い通り出入口前にぽっかりと大穴が開く。後方に噴出した凄まじい爆炎が壁を焼きほむらの長髪を焦がしたが気にする余裕など無い。お土産とばかり廊下方向に手榴弾を二、三個転がして下階へと飛び降りる。

一階の駐車場に降り立ったほむらは素早く二箇所のシャッターへと手榴弾を投じる。一階も毒ガスで満たされている可能性を危惧した事と、逃げ口を作る事で濤羅の目を眩ますのが狙いだ。もちろん逃げるつもりなど無い。逃げたと疑わせる事が重要なのだ。こちらの行動選択肢が多くなればなるほど相手のミスを誘える。本当の最善手はこのビルの支柱にプラスチック爆弾をありったけ仕掛けてビル自体を倒壊させることだ。もしもまどかが捕われていなければ迷わずそうするだろう。

手榴弾の置き土産もさしたる足止めにもならなかった。濤羅は無傷で一階駐車場へと降り立つ。ほむらが空けた一階への大穴を使って大胆にも落下してくる。ほむらからの銃撃を予期していれば絶対に出来ないことだった。もしもほむらが時間停止能力を使用して落下途中の濤羅を狙い撃てばさしもの濤羅でも防ぎきることは出来なかっただろう。それが濤羅の中で芽生えた疑問を確信に変えた。濤羅は駐車場に降り立つと周囲を睨め回す。ほむらが身を隠している場所は濤羅からは大型車両によって死角となっている。このまま身を隠してやり過ごして、逃げ口に釣られて外を探しに行ってくれさえすれば、濤羅との対決を避けてまどかを救い出すことが出来る。ほむらにとっては今はそれが一縷の望みだった。

「先程から身を潜めてはいるが殺気が隠しきれていないぞ」

濤羅が良く通る声で呼びかける。ブラフかもしれない。慌てて動けば敵に利するだけだ。ほむらは動揺せず息を殺す。それでなくとも毒と高圧電流で受けたダメージが抜け切っていないのだ。時間を少しでも稼ぐべきだ。脇目も振らずに真っ直ぐに迷い無くほむらが潜む大型車両に向かって歩を進める濤羅。

〝本当に見えているって言うの？〟

ほむらは疑いつつも隣の車両へと身を移す。ただ隠れ場所を変えるだけではなく意趣返しとばかりに罠をしかけた。濤羅が大型車両の十m前まで来た時、突如として無人の大型車両が急発進する。魔法による物体操作である。大型車両に濤羅を追尾するように魔力によって命令を与えたのだ。無人の車両はまるで人が操作するかのようにエンジンを始動し、殺傷可能位置に来た濤羅に対して猛然と襲い掛かる。濤羅は素早く身を避わすとほむらの逃げた方向へと足を向ける。最早疑いようもない。濤羅にはほむらの位置が見えているのだ。ほむらは次々と身を隠す位置を変え車に魔

力を与える。今のほむらにとってこの車が唯一信用できる兵隊だ。銃弾を避ける相手への対抗手段としてはやや荷が勝つ務めだが、ほむらの援護射撃があれば僅かながらも光明も見えるだろう。駐車場内に残された八台の車を全て発進させてほむらは濤羅と距離を取りつつアサルトライフルで援護射撃を行う。前後左右から突撃を繰り返すほむらの物言わぬ兵隊をいなしながら濤羅は徐々に距離を詰めていく。

　ほむらは援護射撃を繰り返しながら巧みに車を操作し、濤羅の逃げ道を塞いでいく。ほむらの手足となって働く自動車たちも濤羅を追い詰めるには至らない。ほむらは自動車同士を正面衝突させるつもりで強引に操る。自分を轢き潰そうと向かってくる自動車をさっと身を翻して避けるとやれやれと言った風情で意識を丹田に集中する。一番槍とばかりに突っ込んできた車両を跳躍して避けるとその車の屋根に着地する。ほむらが援護射撃で屋根の上の濤羅を射殺するよりも早く濤羅の豪雷功が炸裂する。

「呵ッッ！！」

　鋭い吐気とともに放つ渾身の豪雷功の衝撃波が周囲の自動車に襲い掛かる。豪雷功によって発せられる電磁パルスは全ての電子部品を平等に破壊し尽くす。力を失ったほむらの兵隊たちは慣性の法則に従って緩やかに停止していく。ある車は壁と激突し、ある車は車同士でぶつかり合って止まる。形勢の一変に焦ったほむらは濤羅がこちらに向かってくる前に煙幕を張って時間を稼ぐことにした。

　時間停止の能力は未だに回復する気配がない。銃撃では濤羅を射止める事は出来ない。爆弾、手榴弾を使用しても無理だろう。彼を止める為には大火力や射撃の正確さでは無く、例え行動を予測出来ようとも避けられぬ事象を作り出すか、想像を上回る行動を取るしかない。ほむらはじっと両手を見る。濤羅に奪われた右手には義手が嵌められていた。左手の甲にはソウルジェムが紫色の輝きを湛えている。

〝これだけは使いたくなかったわ。でも…〟

　まどかを助ける為なのだ。この身に代えても守らなければならないのだ。迷う必要など無い。ほむらはサバイバルナイフを取り出すと左手首にあてがった。

　煙幕が晴れる。束の間の訪れた停戦時間は終わり再び両者は対

峙する。

「どうした！鬼ごっこはおしまいか！」

「ええ…ここで決着をつけましょう…」

ほむらがアサルトライフルを腰だめに構える。

「今度こそ我が朋劉豪軍(リュウ・ホージュン)の仇を取らせてもらうぞ！」

濤羅が白刃を引っさげてほむらに向かってくる。ほむらは右半身でアサルトライフルを構えて応射する。濤羅は銃の振動で僅かに揺れてぶれる弾道に合わせて神業のような挙動でみるみる距離を詰める。ほむらは目前まで濤羅が迫るとアサルトライフルを投げ出し濤羅に組み付く。ほむらの予想外の行動に濤羅は不意を衝かれる。揉み合いながらも紫電(しでん)を纏った濤羅の右手がほむらのソウルジェムを破壊すべく手を伸ばす。

「馬鹿なっ…！！左手が…」

「そうよ…あなたを倒すにはこれしか無い…」

ほむらの右手が怪しく光る。濤羅に奪われた右手は義手に代わり、そこには高性能爆薬が仕込まれていた。閃光が二人を包み、爆炎が周囲の車両ごと吹き飛ばす。

◆幕間

上海からこの見滝原へ着くまで大分時間がかかってしまった。理由としては二つある。魔法少女として魔女を狩る傍ら、正規の手段での手続きを踏んでやっと来日したのが今日である。兄に遅れることおよそ一週間である。魔法を使えば正規の手続きを踏まずとも渡航することは出来ただろう。問題は確実性に欠けることだ。暗示の魔法を使えば各所をパスすることはたしかに可能だろう。瑞麗(ルイリー)にとって不幸だったのは、それを教えてくれる良き師がいなかったことだ。結局瑞麗(ルイリー)は不完全な魔法に頼ることを諦め、正規の方法で入国することを余儀なくされた。

キュウべえは魔法少女がテリトリーを離れる事は避けた方が良いと仕切りに忠告していた。魔法少女はグリーフシードで定期的にソウルジェムの濁りを取らなければならない。それに伴い誰かの縄張りの魔女を狩るというのは侵略行為に値するということも教えて貰った。だが、そんなことはどうでも良い事だった。自分の身

が危うくなることも、他の魔法少女と争うことも怖くは無い。今は兄のことだけが気懸りなのだ。

逸る気持ちを抑えつつ、全ての始まりとなった射太興業ビルへと足早に向かう。今の自分には戦う力がある。きっと兄を影ながら支援することが出来る。もしもそれに気づいたら兄はきっとあたしを許さないだろう。それでも構わない。兄の身が無事ならばそれで良いのだ。

見滝原市中央駅からそれほど歩かない距離に射太興業ビルはある。付近まで来た時点で異常があったことは一目で分かる。一階駐車場のシャッターは爆発物で大穴が開き、二階の窓ガラスは破られている。周囲の住宅はこれほどの事態が起きているにも関わらず野次馬すら現れない。僅かに窓を開けて様子を窺っている者が少数いる程度だ。

不吉な胸騒ぎを覚えて瑞麗（ルイリー）は駆け出した。そんなはずはない。あの兄が不覚を取るはずが無い。ここに来るまでも何度も何度もそう自分に言い聞かせてやってきた。近づくたびに不安はさらましていく。爆発で吹き飛んだ自動車の破片や壁に出来た流れ弾の痕が戦闘の激しさを物語っている。不安は更にましていくが兄の名前を呼ぶ訳にはいかない。あくまでも自分は兄に隠れてやってきているのだ。出来ることなら見咎められることなくやり過ごしたい。張りさけそうな胸の高鳴りを押さえつけて屋内へと侵入する。そこには更なる戦いの痕跡があった。正面衝突してスクラップとなった車両。天井に穿たれた大穴。壁の至るところには弾痕が作られ、一つとして無事な面はない。そして何よりこの散らばった肉片はなんだ。爆発による熱で衣服と肉が癒着して焦げ付いてはいるが、はっきりとそれは人間のものだと分かった。瑞麗（ルイリー）の不安は恐怖へと変わりその顔面を蒼白とさせる。

ふと足元を見るとそこには…

〝これは…あの日兄様に…〟

それは旅立つ兄に御守り代わりとして渡した銀の腕輪だった。

瑞麗（ルイリー）は絶叫した。ソウルジェムが急速に濁り、魔女が孵化する。それは兄を失った悲しみを晴らす為兄の命を奪った者への復讐の一念によって産み出された魔女だった。

◆第三章

ソウルジェムから肉体を再生する期間は微睡みによく似ている。夢を見ているような感覚に揺蕩いながらも、魔力の限りを尽くして懸命に肉体の復元をはかる。まどかの安否を思えば、そう長い間放置は出来ない。焦る気持ちとは裏腹に肉体の復元は進まない。指一本動かせない状態が続き、焦燥感を超えて発狂の一歩手前にあった。

肉体の復元の前に精神が壊れることを危惧した私は夢の世界に身を任せることにした。意識を周辺警戒から内へ内へと落とし込み埋没させていく。広がるのは自分がまだ魔法少女ではなくただの人間だった頃の風景。柔らかな感触は自分を救い出してくれた少女の暖かい手。自分が一番幸せだった頃の記憶だ。まだ何も背負わず、何も知らず、何ら手を汚さず、ただ守られるだけだった頃の自分だ。

「どうしたの?ほむらちゃん?」

前を行く友達が優しく微笑みかけてくる。リボンで結った髪が揺れて甘い匂いが鼻をくすぐる。まどかはいつだってお日様みたいな笑顔と甘い感傷を与えてくれる。この子の笑顔が守れるなら何を失っても惜しくないと思わせてくれる。

「ううん。何でも無いわ」

柔らかく微笑み返す。例え夢であっても今はこの甘い一時に包まれていたい。

〃それにしても…一体まどかは私をどこに連れて行くつもりだろう?〃

あくまでも夢の中なので整合性は期待できない。いつか見た風景だけとどこか間違っていたり、自分の希望とは微妙に違っていることは良くあることだ。でも、どこでも構わないんだ。まどかと一緒ならどこだって構わない。

見覚えのある見滝原市街を抜けて幹線道路を渡る陸橋にさしかかる。前を行くまどかが何かを見つけたようだ。

「ねえほむらちゃん。あれ見てあれ」

陸橋から身を乗り出して下を指指すまどかに促されて、私も下を覗き込む。まどかの事だから中央分離帯で動けなくなった猫でも見つけたのかなと目を凝らすが特に物珍しくもない風景が広がるばかりだ。

「まどか。何も見えないわ。いったい何が見えたの」
隣で下を見詰めているまどかに確認してみる。先程までそこにいたはずのまどかの姿が無かった。慌ててまどかを探そうと陸橋から離れようとした瞬間、足元を掬い上げられて地上へと身を投げ出される。地上に落ちる瞬間確かにいつもと同じ顔で笑うまどかの姿を見た。地上に頭から落ちるよりも早く走行中の車両に頭を強かに打ちつけて意識が途絶える。

次に目を覚ました時は病室だった。私の時間遡行の起点となるいつもの病室だ。しかし、カレンダーを見ると明らかに通常の起点よりも日付が若い。どうやら私はまだ入院中のようだ。夢の中なのだから、そういう事もあるだろう。いつもいつも楽しい夢が出てくるという訳ではない。先程の夢だって唐突に理不尽かつ不条理な結末を迎えたじゃないか。しかしよりにもよってこんな思い出したくも無い場所を選んで夢見るとは、自分の不器用さに驚き入る。上体を起こしてベッドから降りようとすると、ベッドサイドにいた少女が声をかけてきた。
「あ、起きたみたいだね。咽喉渇いてない？それとも何か食べる？」

おかしい。この時点ではまどかとは知り合ってもいないはずだ。従ってこの病室を訪れるということは有り得ないのだ。入院中はお見舞いなどというものに縁が無かった私にもしもまどかが来てくれたとしたらこんなに幸せなことは無いだろう。
「そうだ。りんご剥いてあげようか？あたしね、りんごでうさちゃん作れるんだよ」
そう言うとまどかは果物かごの中からりんごを取り出すと器用に剥き始める。小さな手を一生懸命動かして丁寧にりんごを剥いている。
「はい。あーん」
綺麗に皮を剥き、宣言通りに皮をうさぎの耳のようにしたりんごを私の口元に持ってきてくれる。私はまどかに促されるままに口を開けてりんごを咀嚼する。口の中にりんごの甘い香りと瑞々しい感触が広がる。
「おいしい？」
まどかからの問いかけに小さく頷く。もう一つ摘まんで差し出してくるのを受け入れようと口を開けると、首筋に冷たい感触を感じる。まどかの手に握られた果物ナイフがいつの間にか刃渡り

二十センチはあろうかというサバイバルナイフに変わっていた。刃にはべったりと血液が付着している。状況から考えても私の血以外の何物でもない。首筋から血がどくどくと溢れ出して白いシーツを朱に染めていく。私は泣きたいような許しをこうような顔でまどかを見る。まどかは笑っていた。まどかはナイフを持ちかえると身体ごと私に身を投げ出した。刃は私の心臓を深々と貫いた。私の返り血を浴びたまどかはやっぱり笑っていた。

今度は日本風家屋の縁側で目を覚ます。うららかな午後の日差しが気持ちいい絶好のお昼寝日和だ。

「どうしたの?ほむらちゃん。汗びっしょりだよ?」

心配そうにまどかが私の顔を覗き込む。まどかの顔が目と鼻の距離にある。

〝ってコレは…!膝枕って奴じゃない…!〟

私の後頭部はまどかの柔らかな太ももを枕としてどうやら今まで寝ていたようだ。慌てて起きようとすると両手で制止される。

「まだ寝てて大丈夫だって、ほむらちゃんは疲れてるんだからもっとゆっくりしてて」

「でも…」

まどかの足が痺れてしまったりしないだろうか?と口に出しそうになって何だか照れ臭くなって口を噤んだ。

「平気平気。それよりほむらちゃんの寝顔がたっぷり見れたしね。可愛かったよ~ほむらちゃんの寝顔」

そうか。膝枕で寝てれば当然そうなるのだった。盲点だった。

「いつもクールなほむらちゃんが赤ちゃんみたいにすやすや寝てるとこなんてなかなか見れないもんね。うん眼福眼福」

自分の頬が羞恥で紅潮するのを感じて顔を背けた。寝返りを打つような形になってまどかの柔らかな太ももの感触を頬に感じる。

「や…ほむらちゃん動いちゃ駄目だって…くすぐったいよ…」

平気だと言ってはいたが、やっぱり少しばかりは痺れていたのだろう。むくむくと悪戯心が芽生えるのを感じる。今、まどかの足を触ったらどうなるだろうか。芽生えた感情は瞬く間に肥大して溢れ出す。気づくと勝手に手がまどかの踵に触れていた。

「きゅうん!」

まどかは小動物みたいな変な鳴き声をたてて全身を震わせた。
「駄目だってほむらちゃん。あーん、もう止めてー」
止めてと口では言っているが、声色に拒絶の色がない。ここは寝顔を見られた仕返しとばかりにまどかを責めたてる。少しだけ美樹さやかの気持ちが分かるわ。
「きゃーやめて止めてやめて止めてあぁーん」
本当にまどかって、もう…。自分の中の小さな嗜虐心が膨らんでいくのが抑えられない。踵から爪先まで蹂躙した後は踝を素通りしてふくらはぎを攻略する。ここまで来れば最終目標地点の太ももまでは後一歩だ。
「もうーほむらちゃんってば。こうなったらあたしだって負けないぞー」
そう言うとまどかは私の首筋に手をかけた。手にはいつの間に釣り糸のようなか細い紐が握られていた。まどかはわたしの首に紐を回すと後ろからグイグイと締め上げてきた。
何が起こっているのか理解もできずに頚動脈を圧迫される苦しみから逃れようと必死にもがく。
「止めて…まどか…」

首にかけられた紐は細すぎてどんなに指をかけても圧迫を緩和することは出来ない。私は紐を首から外す事を諦め身体を揺すって抵抗した。まどかの態勢が崩れてもつれ合う。それでも私の首から離れないまどかを両手で押しのけて何とか脱出する。再び意識が薄れ景色が消えていく。遠くで声がする。聞き覚えの無い声だ。
「それがお前だ。本当のお前は自己の生存に拘っているだけに過ぎない」
微かに聞き取れる声は確かにそう言っていた。急速に意識が覚醒していく。

気づくと辺りは桃の花が咲き乱れる庭園に一変していた。
「これは…魔女の結界？いつの間に…」
ソウルジェムが魔女との戦いを告げるかのように激しく明滅する。自分が夢の中にいるか、それとも肉体が復元されて現実世界に引き戻されているのかは分からない。
「ここで魔女を放置する訳はいかない。ここにはまどかがいるんだ」
左手の盾から拳銃を取り出そうとしてふと気づく。盾が出せな

い。魔法少女となって以来息を吸うかのように自然に行ってきた行為が何度やっても出来ない。
「無駄だよ。ここでのあなたは無力な人間と変わらないんだ」
声に向かって振り向くとそこにはどこかしら中華風な衣装に身を包んだ少女が佇んでいた。長い黒髪を即頭部に二つまとめてお団子にして黄色いリボンで結っている。幼女のようでありながら、冷めた視線と声色は大人のそれである。
「あなたは誰?ここは魔女の結界では無いの?」
「私は瑞麗(ルイリー)。ここはあなたの言うとおり、魔女の結界の中よ」
「そんな馬鹿な…魔女が人格を持つなんて聞いた事が無いわ」
魔法少女が魔女となった時点で一切の記憶も人格も失う。魔女は悪意と不幸を撒き散らし、人間に災厄をもたらすだけの存在に成り下がるのだ。過去何度も魔女となった美樹さやかにコミユニケーションを取ろうとしたが、その全てが失敗に終わっている。魔女は人を襲う。それだけが唯一の行動様式なのだ。
「ここは夢の世界であり、魔女の結界と言ったら理解してもらえるかしら」
人間の精神を効率的に破壊する魔女だとしたら、内面に踏み込み結界を形成することもあるだろう。それは復讐の魔女。愛しい人を魔法少女に奪われた絶望により姿を変えた魔女。
ほむらは瑞麗(ルイリー)が身構えるよりも早く近接し、顔面への蹴りを放つ。盾が出せず、武器が使えなくとも戦う意志は捨てない。で、あるならば先手必勝あるのみだ。しかし、ほむらの蹴りは少女をすり抜ける。
「せっかちね。ここは夢の中だって言ったじゃない。そして主導権を持っているのは私。この意味分かるかしら?」
瑞麗(ルイリー)がさっと右手をかざすと周囲の空間がほむらを中心に狭まっていく。
「さぁもう一度お休み。今度は醒めないようにね」

再び繰り返されるほむらの夢。まどかと何度も出会い、その数だけ拒絶され殺される。ほむらの心が磨耗され尽くすまで繰り返される醒めない夢。それが復讐の魔女の能力。人間を魔女の供物へと変えて、魔法少女を魔女へと変える力。
ほむらは何度も何度も繰り返す。ほむらが繰り返したループにも劣らぬほどに。彼女が失ったまどかの数と同じ数だけ、

彼女が見捨てた世界の数よりも多くその悪夢は続く。

■■■■■

「こんな夢を何度見せられた所で、私は絶対に絶望したりしない。どんなに苦しくても必ずあの子を救い出す！」

瑞麗（ルイリー）は時折悪夢を中断して、こちらの様子を楽しそうに観察する。私が絶望するのを眺めているのだろう。

「そうかしら？あなたの想いは絶対に満たされない。絶望的にあなたとあの子の気持ちはすれ違っているわ。あなたがどんなにあの子のことを想っても、あの子にはその想いの十分の一も伝わらないわ。そもそも好きという概念すらあの子とはかけ離れているのではないかしら？」

まどかが抱くほむらへの感情が博愛によって成り立つものだ。それに対してほむらが抱くそれは友愛から発して恋愛にいたるものだ。それはいつの時間軸でも同じだった。

「たとえどんなに拒絶されても構わないわ。あの子を死の運命から救い出し、あの子自身の幸せを守れればそれで構わない」

瑞麗（ルイリー）は幼い顔を悪意で歪めて答える。

「本当にそれで構わないの？あなたが人知れず魔女との戦いで命を落としても、あの子はそれに気付きもしない。それどころか、成長して大人になればあなたの知らない男の下で抱かれることになるでしょうね」

ワルプルギスの夜を越えて、まどかが魔法少女となる資格を失うほどに成長する程の先のことまでは考えたことも無かった。そもそもワルプルギスの夜を越えることすら出来ていないのだ。その先のことなど考えたことも無かった。確かに瑞麗（ルイリー）の言うことは一理ある。まどかはごく普通の少女だ。このまま成長すればごく普通の幸せにありつき、ごく普通の幸せを築くだろう。それは平凡だが、自分には絶対に届かないものだ。そしてその生活には自分が入り込む余地など無いのだ。それでも、いやだからこそ、彼女にはそうあって欲しいのだ。そこが決定的に私と瑞麗（ルイリー）の違うところなのだ。

「ええ構わないわ。それが本当にまどかが望むことで、それがまどかの幸せだとしたら。あたしはそれで構わない」

「嘘をつくな！代償を求めない愛なんて・・・有る訳が無い。」

「あたしはそうやって命を救われてここにいるの。まどかの気持ちに報いる為に戦ってきたの」

「減らず口を！」

瑞麗（ルイリー）がその姿をグロテスクな魔女に変えて襲い掛かる。

「そろそろ良い頃合ね…」

現実世界のほむらの肉体が復元された。例え脳を占拠されていようとも、魔力を使用して肉体を動かすことは出来る。ほむらは自分の肉体を魔力で操作する。盾から拳銃を取り出すと迷う事無くこめかみに銃口を突きつけて引き金を引き絞った。側頭部から侵入した弾丸は前頭葉を抉り出しながら反対側へと擦り抜ける。ほむらはそれでも止まらず全弾撃ち尽くす。既にほむらの鼻から上は原型を留めず、脳は周囲の地面に四散した。

「狂ってるわね…もっとも自分の身体を兄様諸共吹っ飛ばすような女だから、これくらいはやって見せても不思議じゃない。でも、残念だったわね。私がいるのは脳じゃないわ。私が語りかけてるのはソウルジェム。あなた自身の本体に語りかけてるの。そんな所を破壊しても無駄よ」

「ええ…けど、どうやら油断したようね…」

頭の半分を失ったほむらが更に駆動する。その動きが復讐の魔女を釘付けにする。それは亡き兄の…戴天流（たいてんりゅう）の動きだった。

〝あなたの本体の場所はソウルジェムの反応が教えてくれる。そしてほんの一瞬隙を作れれば良かった。そうほんの一瞬脳内に巣食ったお前の目を奪えれば〟

中国拳法の深奥にして、内家拳法の裏奥義である紫電掌（しでんしょう）をほむらが使うことなど出来ようものか。いや、出来る。魔法少女が不可能を可能にする存在ならば、どのような不条理であろうとも出来る、出来るのだ。暁美ほむらは魔力によって勁力を強制的に発生させる。ソウルジェムが急速に濁る。人の力を超えた奇跡を引き出す代償は大きい。紫電（しでん）を纏ったほむらの右掌が魔女の身体をとらえる。電磁パルスが荒れ狂い魔女の身体を焼き尽くす。

「あなたもいつか気付くわ…本当にその人を手に入れる為だったら、何を犠牲にしてでも…自分自身すら失っても手に入れるべきだったとね」

「そんな事は無いわ。わたしはきっとまどかを救い出して見せる」

魔女の結界が晴れる。ソウルジェムの濁りが酷い。もしもこのグリーフシードが手に入らなかったらほむらの長い旅もここで終わって

いただろう。

■■■■■■

まどかは射太興業ビル四階のロッカー内に拘束されていた。発見した時は衰弱して意識も無かった。私はソウルジェムを使ってまどかの体力の快復を行ったが、意識は眠らせたままにしておいた。巻き込んでしまった罪の意識からの行動に他ならない。

夜の闇を抜け、まどかの自宅に忍び込んだ。まどかを彼女の部屋のベッドに横たえると私は何事も無かったかのように立ち去る事にした。これで良かったのだ。私は見返りを求めない。私と関わることでまどかを危険に巻き込む訳にはいかないのだ。

私が立ち上がって部屋を去ろうとすると、スカートの裾が引っ張られた。まどかの手がスカートの裾をしっかりと握っている。魔法による催眠はまだ効果があるはずだ。意識など無いはずなのに…こんな事には意味など無いのだ。偶然だ。誰か親しい人間の夢でも見ているのだろう。ただの勘違いなのだ。それでも私の胸は熱くなる。鼓動は高まり、今すぐまどかを抱きしめたい衝動に駆られる。

私はベッドサイドに跪くとまどかの右手を手に取ると甲に口づけをした。これは誓いの口づけ。いかなる嵐が吹こうとも屈しない。例えあなたが私のことなど知らないまま過ごしていたとしても命に代えても守り続ける。誓いを新たにして部屋を出た。風が強く吹いていた。嵐が近づいてくるのを感じて鹿目邸を後にした。

ゲストページ

トリイヤスシ（神風STYLE）・・・・55P

ぬくぬく（猫と万華鏡）・・・・・・・・56P

桜月りん（ペピーチェ）・・・・・・・・57P

◆ゲスト紹介

本文を読んで下さった皆様ありがとうございます。ここからはゲストページとなります。僕の拙い文章に疲れた皆様もここからは素敵なイラストやコミックで心を潤してくださいな。

一番手は神風 STYLE のトリイヤスシさん。表紙イラストも担当して頂きました。自分にとっては初めて同人誌のフリーダムさを教えてくれた作家さんです。VS範馬勇次郎シリーズと言えばお気づきになる方もいるのではなかろうか？本書もトリイさんの作品群に大きな影響を受けています。男の子の浪漫だよな？（異論は許さん）今回の本は本当にトリイさん無くしては発刊出来ませんでした。ありがとうございます。

二番手は猫と万華鏡のぬくぬくさん。日頃のお近付きの甲斐あって寄稿していただく事になりました。感謝。

僕が何も言わずともまどかとほむらが親しげなイラストを提出する辺り本当に出来ている喃。イラストから感じるほんわかとした暖かさと遊び心が大好きですわ。

普段はけいおんをメインに活動しているので、ピクンと来た君と俺は一緒に並ぼうぜ。

三番手はペピーチェの桜月りんさん。4P漫画を頂きました。毎度ありがとうございます。何とも素晴らしすぎる漫画を頂いてしまって何と感謝して良いやら。つか、この4Pで大体元が取れる。まどかさんは無意識と言うか笑顔でどSなことしそうだよね。まったくほむらちゃんが可哀想だとは思わないのかね。（俺だけは言う資格の無い台詞だ）

自分にとっては同人先生的な存在です。基本的に同人関連で分からない事はこの人に聞いておけば大丈夫的な。それ以外は聞くな。という大変分かりやすくも頼もしい方です。普段は忘却の旋律をメインに活動しています。後はハートキャッチプリキュア。どちらも密度の濃い逸品を創作しています。御興味がわいたら御一読を。

それでは再度御協力くださった御三方に感謝を。本当にありがとうございました。

好き好き♡ほむらちゃん♡

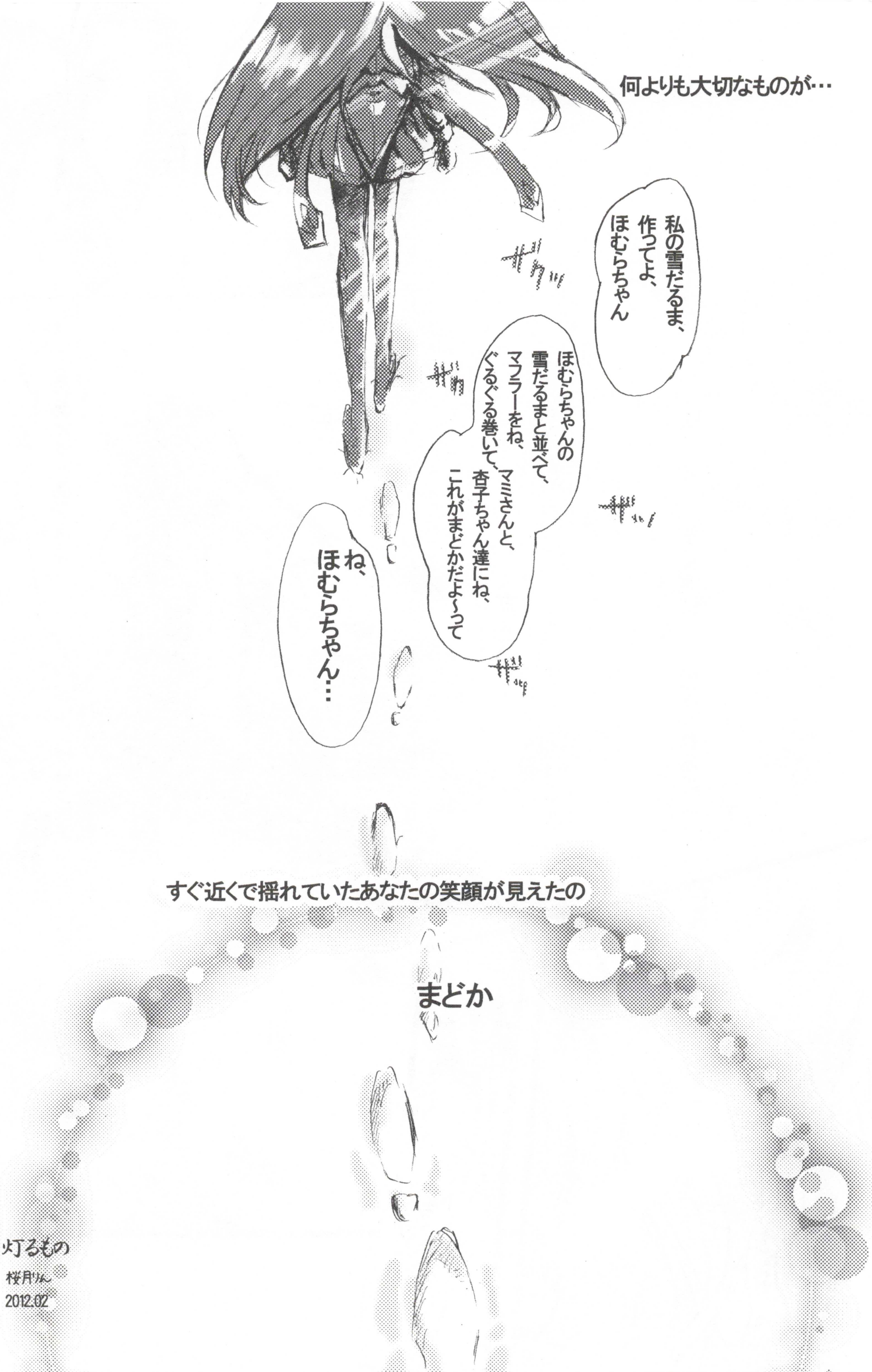
ごめんねほむらちゃん、私、魔法少女になる！
!?
やめてッ まどか！
さぁ、キミの願いを聞かせて！
ザッ
叶えられる願いを十個にして！
世界を繰り返す度、
え…いや、それはちょっと…
えーっ？なんでなんで？
まどかが阿呆になっていく・・・
ごめんねほむらちゃん、私、魔法少女になる！
!?
駄目ッ まどか！
さぁ、キミの願いを聞かせて！
ザッ
叶えられる願いを百万個にして！
今まどかが
100マンコ 100マンコ!!
ちょっ…!? ま、まどか!?
マンコって言った！

注）おモチを焼いているだけです
あ～…
キュウべぇ…
ぬくぬく・猫と万華鏡
クスクス…
…プッ

それでも……
あなたの姿も
言葉も
声も…
あなたとの
距離を　思い知る為
探してしまうというのなら
何で…
馬鹿なの

ザクッ
ザクッ
ザクッ…
そういえば、一度だけ
ほむらちゃんの雪だるま、わたし作った事があったね、
ほむらちゃん

まどかは
…あああ… あっ うっ
まどか…
すぐ側に いてくれるのに
上手に呼べたかな…
今度はね…



灯るもの
桜月りん
2012.02

◆言い訳　解説のこーなー

本文中で色々説明不足だったり、独自解釈気味だったり、そもそも鬼哭街の知名度がアレすぎて何だかよく分からないという声にお応えして恥まりました。読み飛ばし上等企画でございます。

・射太興業

魔法少女まどか☆マギカ十話に登場するやくざ屋さん。ほむらちゃんが初期に武器調達する場所。本来はやくざ屋さんの事務所に銃器が置いてある事は稀なはず。そんな物が事務所に置いてあったらガサ入れ即おロープ頂戴の事態に陥るからだ。どこか安全な場所に隠して必要な時に持ち出すというのが賢い方法だろう。

しかし、例外がある。そもそも取り締まる側の警察とやくざメンがズブズブの関係だった場合だ。その場合はわざわざ隠し場所を変えるような小細工を弄する必要は無いだろう。射太興業はそんな感じなんだと思う。つまり何が言いたいかと言うと、見滝原市って実は結構やばい街かもしれないねということだ。でも、神奈川県の某市もそんな感じだからきっと大丈夫だよ(無根拠)

・射太興業の構成員

丈二、洋一、大西、額に5センチ程の傷のある男、山崎。言うまでもなく名作SFやくざ漫画「代紋TAKE2」の登場人物である。タイムスリッパーつながりということで気づいたら名前が割り振られていた。代紋TAKE2自体は最終回のオチだけで笑いものにされる機会が多いが、やくざ漫画として一大傑作です。長期連載でこれほど完璧に終わらせる漫画も少ないです。是非機会あれば御一読の程を。

・魔法少女の不死性

魔法少女の本体はソウルジェムというのは魔まマ本編の通りです。そしてツイッター上の虚淵玄の発言に「ソウルジェムの真実を知らない場合、即死するような状況に陥った場合、即座にジェムが真っ黒になる事もある」とあります。つまり逆説的に言うとソウルジェムの真実を知っていて、即死するような状況に陥った場合の対処手段を持っていれば再生可能なのです。魔法って便利。

・首と胴を切り離された状態で動けんのかよ？

本文の通り、普通の人間は動けません。しかし、BD特典ドラマの1巻でまどかがほむらに魔法をかけたのを思い出してください。魔法少女は魔力を使って他人の肉体を操る事が出来るのです。強制的に肉体強化しつつ、若干の肉体操作を行ったのでしょう。つまり、あらかじめ胴体の側に首刎ねられた後に動くプログラムを組んでおけば後は脳からの伝達が無くても目的を達成してくれるということです。うっかり首を間違えてパイルダーオンしてたら大変だっただろうなー。魔法って便利。

・うか、何でそんなにほむらちゃんをいぢめんだよ

本編中にやらなかった(やれなかった)事をやるというのは同人誌の醍醐味です。特に肉体破壊に関してはTVの放送コード的に出来ない事が多々あったでしょう。少なくとも青騎士の系譜を辿る虚淵玄氏としては当然やるべきなのですよ！

まぁ何というかケインは肉体的にキリコは肉体的にも精神的にも、そしてその両者の血を受け継ぐほむらちゃんはいぢめられる事で輝く才能を持っているのです。心を鬼にしていぢめてるのです(本当)。ごめんね、ほむらちゃん。

・ほむらをなんだと思ってるんだ？

女キリコ。キリコを始祖として虚淵作品の歴代主人公の血を受け継いで誕生したブッティキャラだと思っています。それ故に物凄く感情移入してしまいます。俺がキリコでキリコが俺でキリコがほむらちゃんなら俺がキリコでキリコがほむらちゃんなので、これでいーのだ。西から上ったお日様が東に沈むのです。

それにしても赫奕でテイタニアを女キリコとして登場させたのは失敗に終わったが、まさかこんな形で女キリコが成功するとは思いもしませんでした。

・鬼哭街

ニトロプラスより発売されたPCゲーム。テキストを虚淵玄が担当。淵曰く脳髄が命じるままに書いてしまったという通り、実に18禁ゲームとしては異色な作品となっている。復讐の鬼と化した生身の拳法家対サイボーグ武芸者という響きが脳にきゅんきゅん来た筆者は一発で大ハマり、以降虚淵に傾倒する事になる。

魔まで一発当てた事だし、その内アニメ化しないかなーと去年の年末くらいからずっと言い続けています。ならないかなー。

・孔濤羅

鬼哭街の主人公。戴天流を操る青雲幇の凶手(暗殺者)。劉豪軍とは共に戴天流を学んだ兄弟弟子。妹思いのお兄ちゃん。

当小説の設定では鬼哭街の物語が始まる前、豪軍にマカオで斬られる前となっている。この時点では豪軍は義理の弟。

・孔瑞麗

鬼哭街のヒロイン。孔濤羅の妹。鬼哭街本編では惨い目に合ってるけど、今のとこは無事だよ!良かったね、瑞麗。

当小説の設定では鬼哭街の物語が始まる前、あのタイミングであの白い生き物に話しかけられたら、そりゃー契約するよねと鬼哭街既プレイ者に思っていただければ幸いである。

・劉豪軍

鬼哭街に登場するキャラクター。青雲幇の副寨主(本文中ではまだ香主)。孔瑞麗の夫。孔濤羅を罠に嵌め、マカオで濤羅を斬る。新婚間もない豪軍が何故濤羅を斬らなければならなかったか、何故瑞麗を輪姦した上に魂魄を五分割しなければならなかったかはゲームで確認よろしく。

当小説の設定では鬼哭街の物語が始まる前、豪軍と瑞麗が結婚する直前としています。まだ完全義体化はしていません。

・謝逸達

鬼哭街に登場するキャラクター。闇医者。鬼哭街本編では瑞麗の魂魄転写を行った。真性のマッドサイエンティストだから実験体が手に入るよーと聞けばほいほい日本までついてくるよね?

・青雲幇

鬼哭街に登場する武侠結社。上海マフィアとも言う。上海のやくざですね。主なシノギ(仕事)はガイノイドの性産業。孔濤羅及び劉豪軍はここに所属している。

・魂魄転写

鬼哭街に登場する技術。魂魄、つまり魂をデータ化して別の容器に移し替えるという技術。脳の電子化と思って良いでしょう。鬼哭街ゲーム中においては性的目的のガイノイドのOSとして魂魄が使用されていて、闇マーケットで大人気。

当小説では、上海では闇で行われている。日本では法整備が行き届かず可能ではあるが真っ当な医者は倫理観から行われないというくらいの積りです。魂魄転写をどう使うかは二章以降に出せれば良いなー

・戴天流

孔濤羅と劉豪軍が共に学んだ内家拳法。インチキめいた超技術が目白押し。

・外家拳

鬼哭街の世界観における中国拳法の二大派閥。型や技法の修練に重きを置き、筋肉や皮膚など人体外部の諸要素を鍛え抜く武術。サイバネ技術の向上により、肉の身体を捨てサイボーグボディを纏う事を選択。

・内家拳

鬼哭街の世界観における中国拳法の二大派閥。外家拳の“剛”に対する“柔”であり、力に対する心気の技。体内の氣が生み出すエネルギー“内勁”を駆使する。外家拳よりも習得が難しく、その秘奥が操れる人間は限られた一握りの者になる。

・復讐の魔女

捏造魔女。結界は鬼哭街のラストシーンのイメージ。使い魔は余裕があれば外家拳の人達を使おうかと思ったが、そんな余裕は微塵もなかったよ…。能力は幻惑。相手の脳内に入り込んで見たくない光景を延々と見せて精神的に責める。あと、瑞麗に関しては魔法少女状態で杏子と戦う展開も有ったんだが…まぁその場合瑞麗が魔女化した場合真っ先に倒されるのは杏子だったのですが。色々ごめんなさい。

あとがき

どうも初めまして、もしくはお久しぶりです。今回は自分の拙い同人誌を手に取って頂きありがとうございます。

バンバンマニアという言葉を御存知でしょうか？自分も人から聞いただけの言葉なのですが。戦争映画などのアクションシーンのみを編集してそのシーンだけを見て楽しむ類のマニアだそうです。終わってみればこの本はそんな感じになってしまったなぁという感じです。いや、スタートはそもそも虚淵作品でコラボして強さくらべっこだったのですが、もう少し色々やれたかなという後悔がわいてきます。頭から尻尾まで延々戦闘シーンで心が疲れた結果が第三章の唐突な幻朧魔皇拳ですね。ほむらとまどかの二人が大好きなのですが、このままだと一切会話が無くなるなーと焦った結果がアレです。脳が疲れ切っていたのでしょう。

この本でどこに出しても恥ずかしくない部分というのは少ないです。一つ誇れる所が有るとしたら、現時点では間違いなく最もほむらの時間停止破りを考えた本だと思います。強力な能力ですが、打ち破る方法はいくつかあって、特に罠に弱いというのは確定だと思います。自分が触れてる物は時間が止められないという設定は罠との相性が最悪です。幸い魔女には罠を張るタイプがいなかったし、アニメ本編ではそこまで掘り下げてやる部分じゃないですからね。

名誉か不名誉かは分からない称号ですが、成人向け以外ではほむらに一番非道い目に合わせてる自信があります。何回死亡確定のダメージを与えたでしょうか・・・魔法少女って便利（もう合言葉か、これ）これも本編内で魔法の概念が曖昧なまま使われてるので、便利に使わせていただいたのが大きいです。

ほむらに対する感情は解説コーナーで書いたので割愛。

正直本編から約一年経過して誰かに先を越されたらどうしようとか焦っていたのですが、全くそんな事は起きませんでした。ジャイアントロボで今川監督が素晴らしきヒッツカラルドのアイディアを誰かに使われないかと心配してた感情ってこんなでしょうか？実際にはそんなもん誰も使わないと言う事まで含めて。あれ一鬼哭街ってアニメ放映直後に全年齢版が発売されたよな・・・それほど評判にならなかった印象が残念でなりません。作品としては文句無しの出来ですし、虚淵作品としては凄く原点的な意味がある一作だと思います。苛酷な状況の中で破滅に向かっていかざるを得ない登場人物という虚淵玄が得意とするキャラクターが最も色濃く出てるのは鬼哭街だと断言できます。設定自体が破滅的な白貌は・・・まぁドンマイ。

もう少し鬼哭街の面子を伸び伸びと書いてあげたかったのですが、前述のバンバンマニア現象が発生してしまったのでもうどうしようもありませんでした。期待してくれる人がいたら申し訳ない。小説だろうとページ数が足りなくなるし、何より書いてる本人が楽しめてない部分が面白い訳なかろうという理論の元消え去りました。

謝逸達がほむらの義手を用意して、代わりにソウルジェムを見せるという展開もあったのですが・・・展開が地味なのと着地点が上手くきめられなかったので没にしました。そもそもこのお話自体がそういえば魔法少女って魂をソウルジェムに移しただけだから魂魄転写すれば元に戻せるんじゃないか？という発想から始まったのですが、終わってみれば初心は完全にどこか消し飛んでました。自分に扱えない得物を持っても結局は振り回されるだけだという良い教訓になりました。いつかこのネタ使ってリベンジしたいなー。もっと上達したらな。

本書タイトルの「Soul for the Sword」は鬼哭街全年齢版のテーマ曲名から頂きました。意味としては”この思いの全てを刃に込めて”くらいの積もりで一つ。鬼哭街の劇中では剣＝濤羅です。物語終盤何もかも失った濤羅が最後は剣に己の全てを託すのが印象的ですね。剣とは何か。剣は武だ。戦う力だ。それくらいに拡大解釈して、まどかを守る為に戦いに純化していくほむらの心情とも重ねて受け止めて貰えたらとても嬉しいです。

今後の予定としては、決定しているところではpixivでFate／ZEROアニメ放映と連動してタイガー道場のコーナーをやります。アニメ放映中に脱落者が出たら読みに来てくださいな。C82はニトロプラススペースで申し込んでいます。受かれば、また虚淵作品とまどかマギカのコラボをやります。本命は沙耶の唄。対抗はファントム。その他はまどかマギカのオンリーに随時出席して、短編を頒布していると思います。

最後に、この本を読んでくださった皆さん、長々とお付合い頂き本当にありがとう御座います。
それではまたどこかでお目にかかれる事を祈っています。サークル「屑★星」のむさしでした。

おくづけ

誌名
Soul for the Sword

発行者 本文
むさし（屑★星） pixiv id=1195601
http://kuduboshi.blog114.fc2.com/

表紙イラスト＆ゲストイラスト
トリイヤスシ（神風STYLE） pixiv id=380997
http://d.hatena.ne.jp/machtorii/

ぬくぬく（猫と万華鏡） pixiv id=9937
http://www12.wind.ne.jp/nukunuku/

桜月りん（ペピーチェ） pixiv id=360956
http://homepage2.nifty.com/peppy-c/

発行日
2012年2月26日

連絡先
メール：snao634@hotmail.com
twitter：musasi_kudubosi

印刷・製本
PrintWark

本書は「鬼哭街」及び「魔法少女まどか★マギカ」の二次創作作品です。

乱丁・落丁本はお取替え致します。
無断複製、無断転載などは作者がひどく傷つくので止めて欲しい。
君にも人の心が有るなら思い留まって欲しい。
そして共に手を取り合い。共に歌おう。母校の歌を！全員バラバラだけど。